
どこか遠く

HOTD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこか遠く

【Nコード】

N1694K

【作者名】

HOTD

【あらすじ】

『その願い、叶えてしんぜよう』
その声がかきつけた。

注 この作品は、多分にご都合主義、厨二成分、キャラ壊が含まれています。

1話（前書き）

というわけで、ぐだぐだとスタート。

1話

元旦。

暇だった俺は、朝から一人寂しく初詣になんぞ行つた。

信心深くもなければ、人混みが嫌いな俺がわざわざ人がゴミのようだ！な元旦の神社に行く理由はただ一つ、神頼みだ。

時が過ぎるといふのは案外早いもので、つい最近高校生になったと思つたら、目の前には受験と卒業が待ち構えていたという次第である。

故に、神頼み。無いよりマシとか、猫の手も借りたいとか、藁にもすがりたいとかそんな理由。

神様もきつと、こんな時ばかりワシに頼りおつてからに！と思つてるに違いない。

そんなわけで、とつととお守りを買ひ、後は神頼みを済ませるのみとなつた。

そうこうしてる内に俺の順番が回つてきたわけだが、さて何をお願いしようか？

つて、考えるまでも無く第一志望に合格出来ますようにという選択肢一択なはずなのだが……

？受験なんて忘れて、どこか遠くに行きたい。
？受験なんて忘れて、どこか遠くに逝きたい。
？受験なんて忘れて、どこか遠くで逝きたい。

眼前には、こんなものが浮かんでいた。
なんだこの選択肢は。

どうやら、俺の脳は受験を前にして幻覚を見せるほどの疲労を感じているらしかった。

待て待て、何故受験に合格が無い？そもそも、？と？は《イク》の意味あいが違うだろ。有り得ないって。

『ふむ。では？じゃな？その願い、叶えてしんぜよう』
「は……？」

頭上からそんな声が聞こえた気がした俺がそちらを見上げると、眼前に迫った巨大な鈴が落ちてきて……

その日、俺の望まぬ願いは叶うこととなる。
その存在を代償にして。

2話（前書き）

いまだ主人公の名前も明かされず

2話

「いつてええええええ！」

『うるさいわい、そもそも今のぬしに痛みなんぞあるかい』

「ああ？あんなバカデカい鈴が落ちて来たら……って、あれ？」

目の前にいる爺の言う通り、ついさっき、自分の顔面に直撃した鈴によつてもたらされたはずの激痛は、それが嘘であつたかのように失われていた。

『言つたとおりじゃろうが、じゃあ早速送るぞい』

「いや、待て待て待て！」

俺に向けた爺の持つ杖が、かん高い音を立てながら光るのを見て慌てて止める。

『なんじやい、騒々しいのう。ぬしら人間はほんに煩いわい、せつかく今年は真面目に働いとるというのに、ぬしみたいな人間ばかりじゃからわしゃやる気がせんのだ』

俺は神社に居たはずなのに、周りを見渡せばただただ白が広がるばかり。そこに、ぽつんと佇む爺と俺。

ぶつぶつ愚痴る、爺を前に俺は疑問をぶつけまくつた。

「なんだよ、あんた。なんだここは？俺をどうした！」

しかし、それが気にいらなかったらしい爺はイチロー顔負けのスイングで俺の側頭部に先端の光っている杖をミートさせる寸前に、

『騒々しいわ！今からぬしに、マニュアルを送るから勝手に理解せい。そして、遠くでよろしくやるとよいわ！』

「ちょ、やめ、ぶっ！」

恐ろしい勢いで、ぶつかって来た杖によって意識を刈り取られることとなった。

そして、意識を失う寸前に爺の言うところの、マニュアルとやらが頭の中に流れこんできたのだった。

「あんの、じっじいいい！あ？なんだこの頭の中に浮かんで来るのは……」

目を覚ますなり、爺に頭部を殴打されたことを思い出した俺が爺を探そうとしていると、唐突に頭の中に浮かんでくる文字に邪魔をされることとなった。

《猿でもわかる、初心者マニュアル

状況を理解していない、そのキミに捧ぐ。

これから、今の状況、そしてこれからどうすれば良いかについて簡単に説明しよう。

さてまずは状況についてだ。

まずは、おめでとうと言っておこう。キミの願いは叶えられた。どうだろうか？お気に召しただろうか？

当然お気に召したはずだよね？

もしや、これは、自分の願いでは無いと思っっているのかな？

しかし、それはキミの間違いだ。

私達は十年に一度、神社に降りる。そして、鈴を切ったものの願いを叶えるのだ。

ここまで、言えばもう気づいてるかも知れないが、わたしは神だ。はは、驚いたかい？

108の願いから、特に強い想いを3つの選択肢を選び出すんだ。そして、その中から選んだ一つの願いが叶えられる。

故に、今キミが居る状況はキミが本心から望んだものというわけだ。

さて、次にこれからどうすれば良いかだが。

好きにしたまえ。キミが、叶えられた願いによって何を得たかはわからない。

が、即物的なもの。例えば、お金や恋人だとかいうものではなく、何かしら危険のつきまとう願いを選んだキミ。

というか、このマニュアルを読むような事態になっているということは、少なからず危険のある願いを選んだはずだ。

だが、安心して欲しい。

脳が危険を感知すると、いくつかのチカラを解除するように弄っておいた。

人によって、発現するモノは違うが、まあ役に立つはずだと思う。

さて、これでキミに伝えることは全て伝えた。

もしわからないことがあれば、頭の中にこのマニュアルを思い浮かべて欲しい。

登録されている内容であれば、可能な限りキミの助けになるだろう。

それでは最後に、キミに幸あれ。

全世界神様委員会会長ぜうす》

マニュアルを読み終わった俺は、その内容を頭の中で反芻し、じっくり考えた末に一つの答えにたどり着いた。

「って、アホかああああ！全世界神様委員会会長ってなんだ！ぜうすってあのゼウスか！そして、何よりっ」

俺は、目一杯空気を吸い込み叫んだ。

「ここはどこだああああ！」

周囲は見渡す限り、森森森だった。

「はああああ、不毛だ……とりあえず、どこか人の居る場所に……」

そもそも、どこか遠くとは言ったが、ここはどこなんだろうか？日本なら良い、言葉は通じる。しかし、外国なら？考えたくもない。英語なんて、喋れないぞ。

「とりあえず家に帰ろう。そして、真面目に勉強しよう。現実逃避なんてするから、罰があたったんだ。それにしても……」

異様に疲れる。歩いてても歩いてもなかなか進まない。

「グルオオオオッ！」

「はは、疲れて幻聴まで」

「グルオオオオッ！」

「なんだかすぐ後ろから迫ってくるような迫力だな……」

「グルオオオオッ！」

「ははは、リアルだなあ……はは……」

「グルオオオオッ！」

ドスン、ドスンという地鳴りにさすがに自分を誤魔化すことも限界も近いと悟った俺は、恐る恐る振り返り、

「あ、死んだ」

振りかぶった熊の右手によって、またしても意識を断たれた。

《スロットが解放されました、確認して下さい》

意識が断たれる瞬間にそんな声を聞いた気がした。

3 話（前書き）

ついに主人公の名称が判明。

3話

「ん……痛っ」

「起きたでござるな」

目を覚ますと、知らない天井が目に入るより先に、こちらを覗き込むようにして見ている目の細い（てか、瞑ってね？）な女の子と目が合った。合ってるんだよ……な？

そんなことを考えながら身を起こそうと試みたが、肩から胸にかけて走る痛みに顔を歪め挫折。

「い……ってえ」

「まだ動かない方がいいでござるよ。応急処置はしたでござるが、傷が深そうでござったから」

「応急処置……？」

「あいあい、お主は熊に襲われたでござるよ」

「熊、くま……そうだ！熊！マジで死ぬかと思った！そもそもなんで熊が？」

「実は……」

そして女の子の口から語られる真実。

熊相手に修行中だったところ、深い一撃を喰らわせた所までは良かったが、不意を突かれて逃げられた。その熊が逃げた先に居たのが俺で、追いついた時には手遅れだったとのこと。

「というわけで、拙者が未熟だったがゆえに逃がしちゃったでござる。いやー、すまぬな。はっはっはっ。あ、ちなみに熊はちゃんと仕留めたからもう安心でござるよ？」

拙者、と妙に古臭い喋りをする何故か忍者のコスプレをした女の子が頭を書きながらからからと笑う。

それを見て、俺も釣られるように笑い

「ははは、そっかー倒したのかー……って、笑えねーよ！？この怪我お前のせいだよ！っか、嘔吐くならもつとマシな嘔吐け！なんだ修行って！なんだ熊を倒したって！お前みたいなガキに、ンなこ出来るかああああっ！」

「あ、ちなみになんの修行中だったかは秘密でござるよ？ニンニン」

その格好で、ニンニン言ってるくせに何の修行か秘密とかバカにしているのかこのガキ。

もういいよ、突っ込むのにも疲れたわ。それより、

「ここはどこだ？キミみたいな子が居るからには日本なんだよね？日本のどこ？」

「うむ、拙者の家でござるよ」

「いや、そういうことじゃなく……ここは何県？」

「滋賀県甲賀市でござる」

「滋賀？そっか、滋賀か」

俺が住んでいるのも、滋賀県甲賀市。つまり、神様とか含めて俺の現実逃避だったわけだ。

「ということは、熊も夢……」

「いやいや、夢じゃないでござるよ？」

「あーはいはい、家に帰って勉強しなきゃ。なんか、わかんないけどお世話になったみたいだから感謝はしとく。ありがとね」

熊にやられたと思っていた胸も、確かめてみると怪我一つなかつ

た。むしろ、前より肌が綺麗になった感さえある。

しかし、布団から立ち上がった俺は目の前にあった鏡を見て驚愕することとなった。

「は……?」

「む? 鏡が、どうかしたでござるか?」

「ちっちゃく……」

「ちっちゃく?」

「ちっちゃくなってる!？」

「???」

鏡に写ったその姿は、自分の子供のころの姿そのものであった。

「いや、まさか、そんな……どこか遠くって過去のことなのか……?」

「過去? いったいお主どうしちゃったでござるか?」

「えーと、キミ。今って、西暦何年?」

「はあ、西暦でござるか? 1996年でござるが……」

「んなバカな! 新聞は!？」

「あいあい、ちょっと待つでござるよ。ホレ、新聞でござる」

「1996年7月26日……マジかよ」

8年前だってか? 笑えねえ……つまり、今の俺は10才ってことかよ。

「ど、どうしたでござるか?」

「なあ、滋賀県甲賀市甲賀町 - x x って、どこかわかる?」

こんな女の子に聞くのは間違いかも知れないが、俺は藁にも縋る思いで聞いてみた。

そして、悲しいかな予想を裏切る（ある意味正しい）形で答えは返ってきた。

「ん。その辺り一帯は、お主が熊に襲われた山のはずでござるが？」
「はは……なんてこった」

俺が住んでた所の近くには山なんて無かった。ここは1996年で、俺の家があるはずの場所には山。
つまり、どこか遠く、つてのは過去、かつ別世界の日本ってことがわかったわけだ。

「ははは……ダメだ氏のう」
「むう、何か訳ありのようござるな。どれ、拙者に話してみてはどうかな？」

「お前みたいなガキに話したってどうにも……」

そこまで言い掛けて、さっきまで細かった少女の目がしかと開き、真剣な表情でこちらを見ているのに気づき、俺は自分の身に起こった出来事について、ぽつりぽつりと語り始めた。

「なんと……そんなことが」
「信じられないだろ？自分でもそうなんだから、お前が信じなくても」

「信じるでござるよ」
「構わ　は？信じる？」
「あいあい、拙者、人を見る目はあるつもりでござるよ？ゆえに、お主が本当のことを言っていると信じるでござる」

細目の少女はそう言うにつこりと笑った。
その時、何かわからないが、心が軽くなった気がした。

「お前……」

「楓でござる、長瀬楓。楓でいいでござるよ」

「楓、か。俺は只野忍、ただのしのぶ忍でいいよ」

「忍殿でござるな、忍殿はしばらく家に居るといいでござるよ。里の者には、拙者から説明しておくでござるから」

「それは助かるけど……里って？」

「秘密でござる。ニンニン」

「いや、まあいいか……これからよろしくな、楓」

「あいあい」

こうして、俺の新天地での生活はスタートすることとなった。

4話（前書き）

主人公、気絶してばかり。そして突っ込んでばかり。
楓書くの難しい……

感想頂けると嬉しいです

4話

楓の家にお世話になることが決まった翌日のこと。

どうやら、俺は捨て子ということになったらしく、拾った楓が、責任を持って面倒をみることで落ち着いたらしい。

「ところでさあ」

「ん？なんでござるか？」

「楓って何歳なの？」

「数えで8歳でござるよ」

「8歳児（実質7歳）に面倒見られる俺（精神年齢18歳）って…」

衝撃の事実に完膚無きまでに打ちのめされそうになった。主に精神が。

というか、8歳にしては精神が落ち着き過ぎだろう。

「修行の成果でござる。あ、なんの修行かは秘密でござるよ。ニンニン」

「突っ込まないよ？あえて」

「む」

「そんな不満そうな顔をするなら、せめて普通の服を着たらどうだ！素性を隠す努力くらいしてみせろ！」

まだ1日しか経って無いとはいえ、忍者ルックな楓しか見たことが無い俺がそう突っ込んでしまうのも無理はなかった。

「それはさておき」

しかし悲しいかな、さておかれてしまった。

「忍殿は、これからどうするでござるか？」

「どうするって言われてもな。好きにしろとは言われたけど、何したらいいかわからないし」

「言われたとは……ああ、マニュアルというやつでござるな。それで調べてみてはいいかな？何かわかるかも知れぬぞ」

「そういえば、わからないことがあればマニュアルを使ってみる的なことを言われた気が……よし、やってみっか」

確か、頭の中でマニュアルを思い浮かべて

《パーソナルデータのロード中 マニュアルが起動されました》

すると、頭の中に機会的なアナウンスが流れてきた。

「マニュアル出た！」

「おお！して、なんと？」

「待つて、今調べるところだ」

えーと、”これから何をすればいいか” っと。

《解答 ご自由に》

無機質な声で無情なことを言われた。

「ひでえ」

「む、どうしたでござるか？」

「ご自由に、って答えが返ってきた」

「そ、それは酷いでござるな」

「くそ、こうなったら片っ端から聞きまくってやる！俺の居た世界には戻れるのか？」

《解答 不可》

「俺はなんでこの世界に来たっ？」

《解答 本人の真の望みによって》

「俺が居なくなっただけで元の世界でどうということになってる？」

《解答 変化無し》

「それはどういう意味だ？」

《解答 質問を正しく入力して下さい》

「ちっ、俺が居なくなっても元の世界に変化が無い理由は？」

《解答 あなたの世界での、あなたという存在は、新たな世界に転移した時点で消失しています。ゆえに、存在が無い者が居なくなっても変化は起こりません》

「この世界での俺の存在はどういう扱いになってる？」

《解答 不明》

「ははは……ダメだ。やはり死のう」
「ちょ、どうしたでござるか！？」

楓の心配する声をよそに、俺はネガティブ街道まっしぐらだった。

「くそ、こうなったら片っ端から聞きまくってやる！俺の居た世界には戻れるのか？」

忍殿は目を瞑って質問を口に出して言った。

「俺はなんでこの世界に来たっ？」

「俺が居なくなっただけで元の世界でどうということになってる？」

「それはどういう意味だ？」

「ちっ、俺が居なくなっても元の世界に変化が無い理由は？」

「この世界での俺の存在はどういう扱いになってる？」

そして少し間が空き、

「ははは……ダメだ。やはり死のう」

「ちよ、どうしたでござるか！？」

ひたすら質問していた忍殿が、突然ネガティブ全開になったので、拙者は慌てて忍殿の身を揺さぶった。

「ふふふ、俺はもう死ぬんだ……現実逃避し過ぎて異世界に来ちゃったんだ、もう戻れないんだ……あはは！」

「こ、これは……」

目に光の無い忍殿。

重症かも知れぬ……面倒をみると決まった以上、拙者がなんとかせねば！

「忍殿、いったいどうしたでござるか！拙者に話してみるでござる！」

「あはははは！あはははははははは！」

「むう、これはいかな……すまぬ、忍殿」

「あはははぶツ！？」

拙者が、忍殿の首に手刀を落とすと、忍殿は眠るように意識を失った。

うーむ、どうしたものか……

「どうしてこうなった？」

何故かズキズキと痛む首筋を抑えながら呟く。
目を覚ますと、大自然に囲まれていた。

「忍殿は、拙者としてばらく修行をするでござる。何をするかはそれから見つければよい」

「修行って……」

「うむ、忍殿には隠していたのだが」

腕を組んだ楓は深刻な表情でそこまで言つと、一呼吸おき、目をカッと開くと同時に、

「拙者、実は忍者でござる！」
「まさか気づかれて無いとでも！？むしろ、そっちにびっくりしたわ！」

驚愕（もちろん言った通りの意味で）の事実を与えてくる楓。

「いやいや、忍殿が驚くのも無理はござらん。拙者の偽装は完璧だったでござるからなあ」

「俺は楓がどこまで本気なのかわからないよ……」

「というわけで、まずは食料調達から覚えるでござるよ。修行するにあたって、自給自足が基本でござる」

どういうわけだと突っ込みたい気持ちを抑えながら、楓に尋ねる。

「自給自足ってのは山菜でも集めればいいのか？でも、山菜の見分け方なんてわからないんだけど」

「拙者が教えるでござるから、忍殿は一つずつ覚えれば良いでござるよ。まずは、キャンプを作るでござる」

「りょーかい」

楓に着いてしばらく歩くと、川がすぐ目の前にある、キャンプに適してるっぽい場所に出た。

はい、っていうのは俺にキャンプに関する知識が無いからだ。念のために。

「この辺りが丁度良さそうでござるな、では早速キャンプを張るとするでござる」

「あ、俺も手伝うよ何す」「ニンニン」「れば　って、おいしい！？」

もう何度目になるかわからない突っ込み、そして突如4人になった楓を、更にはその4人の楓が早業でキャンプを組み立てていくのを目にした俺は、軽く無い目眩を覚えた。

「……うむ、完成でござる。っと、何か言っただござるか忍殿？」
「……」

4人の楓がくりりと同時に振り返り、やはり同時に言葉を発する。そんな楓を見て、俺はただただ溜め息を吐くことしか出来なかった。

「ふう、食った食った。美味しいもんだな」
「それは良かったでござる」

あのあと、親鳥を追いかける雛鳥のごとく楓に着いて行った俺は、山菜採りのノウハウ（分身が印象的過ぎて覚えて無い）と、川魚を穫るノウハウ（ポーンとか音が聞こえるくらい軽快なジャンプからのクナイ投げ。勿論出来なかった）を教わると、早い夕飯を済ませたのだった。

「そつえば風呂はどうするんだ？」
「ん？それはホレ、あそこに」

楓が指差す方向を見て見れば、いつの間にか設置されていた、ドラム缶風呂と思わしき物と、その火の調整をしている楓の分身2体。

「なんてシュールな光景なんだ……」

「ささ、入るでござる」

「あ、ああ。じゃあ、お先に風呂もらっわ」

風呂に入ろうとドラム缶に近づくと、

「ささ、脱ぐでござる」

「遠慮などなさらずに」

「ちよ、やめい！自分で脱げるから、やめっ……アッー！」

身ぐるみを剥がれた俺は無理矢理ドラム缶にぶち込まれた。もうお嬢にいけない……。

そんな感傷に浸っている時だった、

「では、拙者も失礼して」

「え？ちよっ」

俺に向かい合うように、楓がドラム缶に入ってきた。勿論身につけているものなど何も無く、興奮した俺は

「って、興奮するか！そんな趣味は断じて無いっ！」

いきなり意味不明な言葉を発した俺に疑問符を浮かべるも、楓の興味はすぐに移った。

「???昨日負ったはずの傷が無い……?どついうことでござるか？」

「さあ、俺もわからない。怪我をしたのは間違いないんだよね？」

「うむ。拙者、間違い無く手当てをしたでござるから」

「じゃあどつして……そいえば」

「む?」

俺は思い当たることがあり、目を瞑るとマニュアルを呼び出した。

「なんで、俺の怪我が治ってる？」

《解答 解放されたスロットによる副産物です》

確かに、そういえば気絶する寸前に何か聞いたような？とにかく聞いてみるか。

「解放されたスロットってなんだ？」

《解答 解放されたスロットとは、神による恩恵。状況、そして個々のパーソナルによって目覚めるもの。それがスロットです》

じゃあ、俺の傷が治ったのはスロットとやらのおかげなのか。最初にマニュアルに書いてあった”チカラ”ってのはこのことだったのか。でも副産物ってのは？

「なんのスロットが解放されたんだ？」

そして、その答えが俺の人生を大きく左右する原因になるということに、この時の俺は気づいていなかった。

《解答 パッシブスロット、戦闘民族の解放を確認しました》

5 話（前書き）

今回からが本編というところでしょうか？

麻帆良に行かないと、話は進まないってことで、今回は一気に時間が飛びます。

感想頂けると嬉しいです！

むせび泣きます！

5話

俺がスロット解放によって得た能力、”戦闘民族”。いわゆるサヤ人。どうやら、その特性が俺に備わったらしい。
マニユアル曰わく、

- ・深いダメージを負った上で回復すると戦闘力が大幅に上昇。
- ・修行によって、さらに力の上昇が可能。
- ・超人的な回復力。
- ・現段階では不明（どう考えてもスーパーサヤ人です）

まあ、確かに自分次第では確実に強くなれるだろうさ。

しかし、だがしかし。

こんな能力が役に立つ機会なぞ、この日本においてそうそうあるはずがない。

「そう思っていた時期が俺にもありま」只野さん、後ろです！」「し、ぶっ！？」

桜酒？（確かこんな名前）さんの警告とほぼ同時にきた、背後からの一撃を受けて宙を舞いながら、『これが全部夢だったらいいのになー』なんて、こっちにきてから既に何度も繰り返したせいで、癖になりつつある現実逃避をまたしてもやってしまいそうになるのだった。

楓に拾われてから、特にやりたいことも、やるべきことも無く、楓の修行に渋々付き合うこと4年と9ヶ月。

時には、野犬の群に襲われ。

時には、野生の狼に襲撃され瀕死になり。

時には、野生の熊にまたしても襲撃されて瀕死になり。

時には、なんかやたらと動きの洗練された熊（忍熊というのを後に知った）に襲撃されて瀕死になったり。

他にも、修行と称して、滝から落とされたり、崖から落とされたり、怪しい色をした薬を飲まされたり、突然後ろから斬りかけられたりエトセトラ、エトセトラ。

楓に戦闘民族的能力について教えてからというもの、毎日がエブリデイだった。

じゃなくて、毎日が地獄だった。

そのお陰か、身体能力は里でもダントツで一番だったし、11歳で中忍、12歳で上忍入りを果たすという、甲賀の里でも史上初と言われるほどのスピード出世となった。

特に潜入任務と白兵戦においては、忍の右に出るものはいないと言葉を里長から頂いたほどである。

そうそう、忘れていたけど、楓の父親が里長だったんだ。

楓みたいなガキが、どうすれば里の人間に、俺みたいな身元不明のガキの滞在許可を取ることが出来たのか不思議でなかったのだが、それを聞いて納得したのだった。

そして俺は、正式に里長の息子として引き取られた。

つまり、楓の義兄になったというわけだ。

上忍になった際に、何故か楓と婚約するしないの話になったが、俺は逃げ出した。

話はそれだが、そんなわけで山中にある甲賀の里にて、修行したり、学校行ったり、任務行ったり、任務行ったり、任務行ったり、修行したり任務行ったりな4年と9ヶ月を俺は過ごしたわけだ。

そして昨日。

珍しく、任務も修行も学校（学校は春休みだったが）も無かった俺が、里の外に出る許可を得るために義父の元へ訪れた時のことだった。

「忍か、ちょうど良かった」

「何かようでもあったの？義父上」

「うむ、お前には明日から転校してもらったことになった」

「は？何をいきなり……」

「場所は、埼玉県にある麻帆良学園本校男子中等部。名前くらいは聞いたことがあるだろう？」

確かに、聞いたことがある。麻帆良学園と言えば、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってきた都市。

老若男女、麻帆良学園を知らぬ者は誰もいないと言われるほどに有名な場所だ。

「何故そんな場所に転校を？里の外に出るなら、わざわざそんな場所に行かなくとも」

「楓をな、外の世界にて研鑽を積ませたいのだ。そして、あの学園にはそれを積むに値する秘密が……」

あえてその先を言わず、何かがあると匂わせる義父上。
べ、別にそんなこと言われたって気にならないんだからねっ！いや、ガチで。

「それと、俺の転校に何か関係が？まさか、楓が心配だから、俺に着いて行けとか言うつも「忍よ。これは、任務ぞ！」りじゃ……はあ。承知！」

それでもシノビのはしくれ。任務と言われた以上は長の命に従う他無い。

「うむ、では早速出発しなさい」

「え？」

「楓には既に準備させてある。お前の荷物も、ホレこの通り」

義父上はそう言うと、懷から旅行用のポストンバックを取り出す。どうやってそんなことにしまったんだ！って、俺が突っ込むと思っただろう？

俺は悟ったね、ちっちゃいことは気にすんな、わかちわかちこっつてな。

この世界そんなこと気にしてたら生きていけないのだ。

そして俺と楓は、その日に麻帆良学園へと旅立った。

麻帆良学園に着いた俺達は、長から、既に学園に話は通してあると聞いて居たので、それぞれ男子中等部、女子中等部への入寮手続きを済ませると、その日はすぐに就寝。

翌日。

どういう訳か、俺は学園長室に呼び出されていたのだった。

「うむ、キミが忍君じゃな？」

「えーと、自分に何か用でも？」

「キミのことは、甲賀の長からよく聞いておるぞ。シノビとしての腕は里長にも劣らず、白兵戦と、潜入任務は当代一じゃとか？そのうえ、成績も優秀らしいのう」

シノビの方とはもなく、中身18歳（今は22歳だが）の俺が、小学校4年生から勉強をやり直して、成績が悪い訳が無いのは当然だった。

むしろ、受験間近だった俺が中学レベルの勉強が出来ないとか恥ずかしさで死ねるレベルだ。

「はあ、それはどうも。で、本題に入りませんか？」

「では、そうしようかの。本題というのは、キミの仕事のことじゃが、とりあえず金曜と土曜でよいか？」

「は？」

仕事？金曜と土曜？なんのこっちゃい。

「フオ？長から、楓ちゃんとはもなく、キミのことは自由にこき使つてよいと聞いておるのじゃが？」

「あんのジジイ……！」

引き取ってくれた時は優しい人だと感心したが、俺と戦って負け

てからというものの、やたらと嫌がらせが増えていたりする。

「その様子じゃ知らなかったようじゃの？しかし、困ったのう。貴重な頭数じゃと勘定に入れておったのじゃが……」

「いえ、やりますよ。一応、義父上にはお世話になっていますからね。それに、仕事というからには勿論これも入るのでしょうか？」

これ、と学園長に向かって指で作った輪っかを見せる。
すると、学園長はしかと頷き、

「もちろん。甲賀上忍を雇うんじやから、一日これくらいは出させて貰うぞい」

「一万、ですか？」

学園長は指を一本立てている。

「いやいや、十万じゃ。一晚で、十万。どうじゃ、破格じゃろ？」

「まあ、確かにウマい話しではありますが……相応の危険はつきまとうのでしょうか？」

「うむ、それについて話しするにはちと大事なことがあっての。

里長の信頼も厚いきみを信用して明かすのじゃが 実は、この学園には魔法使いがおるのじゃ。そして、わしも魔法使いなのじゃよ」

「へー」

「す、少しは驚いたりしてはくれんのかの？」

異世界に來たと思ったたら若返って、しかも自分を保護してくれた人間が忍者で、さらに自分が戦闘民族になっていた！以上のことが無ければ、魔法使いが実在している程度は、なんてこと無いのだ。

「で、それがどうしました？」

「わしの孫娘、木乃香というんじやが、それがちと訳ありでの。身を狙われとるのじゃ」

「それは大変ですねえ」

訳あり、ね。気になるけど、シノビとしての経験上、こういふことは知らない方が良かったりするのであえて追求はしない。

「うむ。さらにこの学園には、図書館島に眠る、禁書の山もある。

ゆえに、学園への侵入を企む者も少なく無いのじゃ。昼間は、誰かしらが気づくから良いのじやが、深夜はやはり交代制での」

「で、自分は金曜と土曜の深夜に、警備と侵入者が入れば排除を行えば良い、と。わかりました、お受けしましょう」

深夜、長くとも7時間程度働いて10万。

任務より簡単で、こき使うという割にはたったの週2勤務。ここは天国か？

「フオフオ、ではキミの相棒となる子を紹介しようかの。そろそろ来るはずじやが「失礼します」噂をすればじやな」

「この子が相棒、ですか？」

扉から現れたのは、なんと小学生ほどの女の子。

前髪を左側に引つ張って結った、サイドポニー（合ってるかは知らん）にしているのが印象的な少女だ。あと、刀らしきものを手にしている。

「桜咲刹那です」

「刹那くん、彼がキミの相棒になる」

「あー、只野忍です。よろしく」

「キミ達には、しばらくの間パートナーとして深夜の警備をして貰

う。では、早速今日から働いて貰おうかの」

こんな子供、と言いかけたが、良く考えればちっちゃい頃（昨年辺りからいきなり色々大きくなったので、昔のことを言う時はこう表現している）の楓は、8歳の身にして分身やらなんやらやっていたわけだし、見た目では実力を計れないことを思い出した。

「あー、桜里さん？今日からよろしくね」

「桜・ざ・き！です、よろしく願います。私はこれで、失礼します。では、後ほど」

桜咲さんね、桜咲。よし、忘れないようにしないと。
それにしても愛想の無い子だな、桜酒さん。

「じゃあ、俺もこれで失礼しますよ。今日は学園内を楓と2人で見て回るつもりだったので」

「刹那さんと仲良く頼むのう。フオフオフオッ」

その夜。

「では、行きましょうか」

「了解」

世界樹を中心に、麻帆良学園本校男子中等部、女子中等部までが俺と桜酒さんの警備範囲。

他の場所は、他の警備班が受け持っているらしい。

一通り警備を終え、暇を持て余し始めていた時、事は起こった。

「なんか……一人？いや、数が増えてる？」

自分の気配を消し、目を瞑り、人が持つ気を頼りに広域的に気配を感じ取る。

これが、俺を潜入術において甲賀一と言わしめる所以だ。

「2、5、10、まだ増える？なんだこれは」

数が50に到達しようという頃、一つの気配がこちらに向かってくる。

これは……桜酒さんか。

「只野さん！」

「わかってる。侵入者は、50。じゃなくて、51名。どうやら俺たちが一番近いみたいだ」

「本当ですか！どうしてそんなことが！？」

「それは……企業秘密ってことで。それでも一応、シノビなんでね」

そんな軽口を叩きながら、侵入者の居る方に向かって駆け、桜酒さんも俺を追って走る。

そして、

「なんだこりゃ。ハロウィンにはちと早いだろ……」

眼前に広がるのは、50もの異形。

「鬼です。召喚出来る数は術者により異なりますが、この数だとは

ば間違いなく一流の術者でしょう」

「あー、連続召喚みたいなのってのは可能なの？」

「可能か不可能かと聞かれれば可能です。しかし、もし出来るほどの魔力があるのなら、わざわざ小分けにせず一気に出しているでしょう」

いや、それはどうだろ？まあ、可能ということが判ければ、こっちは万が一の時のために余力を残して戦うだけだ。

背から小太刀、”雲水”を静かに抜き放つ。

目の前には、2メートルもありそうな一角で二つ目の鬼。

そいつはニヤリと口を歪め、

「なんや、見慣れん場所に呼ばれた思ったらガキ2人かい。悪いけどこつちも仕事やからな、片付けさせて貰うで」

「驚いたな、喋れるのか」

「兄ちゃん鬼みたの初めてか？喋るのが人だけやと思ったら間違いや」

「ああ、鬼が喋ることにも驚いたけど、まさか首を斬られても喋っていられるとは。桜酒さん、こいつどうやったら倒せるのかね？」

「只野さん！何を呑気に話し え？」

「あゝ？」

鬼はそれだけ発すると、首が動体から転がり落ちて地に倒れ伏し、虚空へと消えさった。

「なんだ、ちゃんと首を落とせば倒せるんじゃないか」

「なっ！いつの間に！？」

どうやら桜酒さんは俺の動きを追えていなかったようで驚いている。

それにしても、今は念の為に放った本気の一撃だったわけだが、思ったよりも鬼は強くないようだ。

始めは、現代日本において戦闘民族的能力がどれほどの役に立つものかと思っただけだが……確かに自分次第では確実に強くなれるだろうさ。

しかし、こんな能力が役に立つ機会なぞ、この日本にそうそうあるはずがない。

「そう思っていた時期が俺にもありま」只野さん、後ろです！」「し、ぶっ！？」

背後からの一撃で宙を舞う俺。すると、これまでのことが走馬灯のように……

異世界で忍者になって、異形と超バトルって、なんかの漫画かよ。そんなのは、マガジンかサンデー辺りでやってろよ。

受験を前に現実逃避したってだけなのに、この罰は酷くないかい神様よ？

「只野さんっ！」

「走馬灯の……って、大丈夫大丈夫。俺わりと丈夫なんだ」

宙を舞ながらひらひらと、桜酒さんに手を振り、体を捻って着地。胴を上下に切り離されて、ドサリと崩れ落ちる狐面の鬼。

「また！？どうやって……」

「だから、企業秘密でござるよ。にんにん」

茶化しながら、わざとらしく胸の前で印を組んでみたりして。

まあ、攻撃された瞬間に超速で一回転して胴を斬っただけですよ。

「えーと、桜酒さん術者任せていい？」

「あ、はい……って！この数を一人で大丈夫なんですか？」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。パパツ、と終わらせるからパパツと。俺の実力の一端は見たでしょ？」

「わかりました、ではここはお任せします……それと、私の名前は、さ・く・ら・ざ・き・ですから！」

「はいはい、気をつけてー」

さくらざき、ね。よし、覚えた。

桜沢さんが、逃げる術者を追って、ある程度離れたのを確認してから俺は戦闘モードに移行する。

聞くとところによると、桜沢さんはまだ小学6年生（もうすぐ中1）だとか。

「そんな子に、鬼のミンチなんてスプラッタは見せられんよなあ。

倒しても、数秒は消えんようだし」

「兄ちゃんちよつとはヤル見てーだが、嬢ちゃんの前で少し見栄張り過ぎたな。ちつと痛い目みとこうか？」

「じゃあパパツと行くかパパツと」

「はじめよかあっ！」

「……いや。もう、終わりだよ」「……」

発せられるのは、鬼たちの後方。

俺を囲むように、48体の鬼がじりじりと包囲を狭める。

しかし、さらにその後方4方向から、俺の影分身4体が右手を突き出した状態で突撃。

右手に宿すは、うずまきな忍者の必殺技である

「……螺旋丸っ！」「……」

中心にいた俺（本体）は、螺旋丸発動と同時に巻き込まれないようにジャンプ。

チャクラと気は本質的には似たようなものらしく、思いつきでやってみたら完成してしまった。

一度人間に使ったら、ただの肉片になったので使用禁止指定にした技だったが、異形で、かつこの数を相手にするなら問題無いだろう。

何より、消えてくれるのであと片付けの心配が無い。

「ぎゃっ」

「ぐおっ」

「むおっ」

「「「うがあああああ！」「」」

成す術も無く、問答無用で気の渦に巻き込まれる鬼たち。

「トドメ、つと」

四方からの螺旋丸で、中心に圧縮された所で、空中からのトドメの螺旋丸。

四方から、そして上方から圧縮された鬼たちは、またたく間にミンチ（以下自首規制）。

「ほら、パパッと終了」

残ったのは、螺旋丸によって地面に刻まれた亀裂のみ。
さて、桜沢さんの方はどうかな？

その後、すぐに桜沢さんと合流。
捕縛された侵入者を、学園長に引き渡した後に初日の任務終了となった。

「今日はお疲れ、桜沢さん」

「ですから、さ・く・ら・ざ・き・と何度言えばあなたは……」

「あれ、そうだっけ？じゃあ俺はもう帰るから。また明日、」桜咲
”さん”

「あつ、待っ」

後ろから何か呼び止める声が聞こえた気がしたけど、華麗にスルーした。

今日も、昼から楓と学園内を見て回る約束があるから少しでも寝ておきたいのだよ。

「あれ、そうだっけ？じゃあ俺はもう帰るから。また明日、」桜咲
”さん”

「あつ、待ってください！あの技はいつたい？」

声を掛けるのが遅かったのか、聞こえていて無視されたのか、只野さんは足を止めることなく影に溶けるように消えてしまった。

「まったく……良くわからない人だ」

人の名前をすぐ間違えると思ったら、私に感づかせる事無く相手を斬り捨てるほどの剣捌きを見せ、48体も居た鬼を5分も経たず

に殲滅してみせる戦闘力。

まあ味方であるから、心強いことには変わりないのだけど。

そういえば学園長先生が、あの若さにして甲賀の里でも屈指のシノビと言っていたな。

「確か、昨日同室になった長瀬と同郷だったはず。少し探りを入れてみるか……」

目の細い、胸の前で印を組んでニンニン言うくせに、忍者ということ在必死で否定する同室の少女を思い浮かべながら、部屋に戻る刹那であった。

「クク、どんなヤツが来るかと思えばなかなか面白いではないか」

あの、超人的速さから繰り出される一撃全てが必殺の威力。気づいた時には斬られているのだから、それも当然だろう。

もつとも、それがまかり通るのはBランクの相手までで、AランクやSランク、そして自分のような化物ランクには、それだけでは全く通用しない訳だが。

「まあ、私には遠く及ばんがな。そういえば面白い技を使っていたな、少し遊んでやるか……」

学園、さらには魔法世界において、目をつけられてはいけない人物ナンバー1に忍が目をつけられた瞬間であった。

5話（後書き）

ちゅーわけで、一気に時間が飛んじやった5話。
いかがでしたでしょうか？本編開始の一年前あたりですね。

里長ゝの辺りは、完全に作者の適当設定です。

今回出てきたランク。

作者の中では、こんな感じに設定してあります。

化物：エヴァ、ナギ、ラカン等

S：フェイト（弱）、アルビレオ等

A：魔法世界編時のアスナ、刹那等

B+：本編開始時の刹那等

B：一般的に、一流と言われるレベル

Bの所だけ細かくわけましたが、他のランクもBみたいにピンキリがあるみたいな感じです。

その他、質問ありましたらどうぞ遠慮なく聞いて下さい。

6話（前書き）

今回はちょっと短め。

さらなる感想待ってます><

6話

麻帆良に来てから1ヶ月。

麻帆良学園本校男子中等部に転入した俺は、昼には可もなく、不可もなく、な中学3年生として生活を送り、夜には学園の警備員として働いていた。

「んー、まあこんなもんか」

「しかし、拙者まで買って貰って本当に良かったでござるか？」
「問題無い。最近ちよつと懐が潤ったんでね」

そしてつい先日、警備の報酬が手に入ったのだ。

そんなわけで、中学3年生にしては潤いに潤った懐とその足で、学園都市から出て携帯を買いに行っていたのだ。

「そういえば最近、刹那の口からやたらと忍の名前を聞くのてござるが？」

「ほう、ついに俺にも春が「それは無いでござる」……ですよねー」

5年近くも経てば、呼び名から殿も外れる程度には親しくもなるましてや、今は義理とはいえ兄妹。忍と呼びすてにするように約束させた。

桜咲さんが、俺のことを話してって何の話だろうか？

やっぱり、最近しつこいくらいに聞かれる、強くなるための方法だろうか。

あ、話は変わるが楓のルームメイトが桜咲さんということを最近知った。何かの作為を感じるのは気のせいだろうか？否、気のせい

ではあるまい。

「刹那とはどこで知り合ったでござるか？」

「つていうと？」

「刹那に聞いてもはぐらかされちゃうでござるし。まさか忍、お主……」

楓がいつもの糸目をカツと開く。

普段ほのぼのした感じを醸し出している分、本気になった楓は結構迫力がある。

「な、なんだよ？」

「よもや、中学生をナンパしたわけでは……」

「中学3年生（中身23歳）が、中学1年生（実質12歳）をナンパして何か問題「ほほう？」ありますよね！だから、こんな所でクナイ出さないで下さいっ！」

“ナンパして”まで言った辺りから、目をギラリと光らせ、いつの間にかクナイを手にする楓。

「ともかくだ、別にお前が心配してるようなことは何もないっ！」

「……別に。心配してるわけではござらんが」

とか言いつつ、先ほどのギラギラした雰囲気から一転、いつものほのぼのに。

「ふう……話は変わるけど、麻帆良学園っておかしくないか？」

「おかしい、というと？」

「例えば、朝からやかしている中武研の女の子。聞けば、あれでまだ1年生で、しかも部長も勤めてるとか」

別に強いのが1年生だとか、部長が1年生だからおかしいってわけじゃない。

おかしいのはもっと根本的な所だ。

「古菲でござるな。実は拙者と同じクラスでござるよ。拙者や忍ほどではないでござるが、アレはなかなかやるでござる」

「そこだ、そこがおいしい」
「はて？」

何か問題が？と、両腕を組んで首を傾げる楓。

「俺やお前ほどでは無いと言っても、アレの強さは本物だよ。しかも、まだまだ伸びしろもある」

「で、ござるな」

「でも、考えてみる。あんなに強い中学1年生の女子。日本的に有名でも、おかしく無いレベルだ。しかも可愛い！」

「可愛い……？」

「いや、ま、待て。はやまるな」

またしても、クナイを手にした楓を宥めながら話を続ける。

「とにかくだな、あんなのが居てテレビの取材の一つや二つ来ない方がおかしい」

「うーむ、そう言われてみればそんな気がしなくもないでござるが」
「おかしいのはそれだけじゃない、世界樹と呼ばれるほどに馬鹿デカイ木とかもそうだが、今の世界の技術力では有り得ないロボットとかな」

「まあ、確かにそれはそうでござるな」

「何よりおかしいのは、それらを見ても“すげー”以上の感情を抱

かない先生及び生徒共だ。この学園、絶対なんかあるぞ。楓も気をつける」

任務のことだから楓には教えられないため口には出さないが、“魔法使いがいるってこと以外にな”と、心の中で付け足す。

「あいあい」

楓の返事を頭の隅で聞きながら、この学園で過ごした1ヶ月を振り返る。

そして、改めて確信した。

忍者が居るんだから、魔法使いが居ることくらいは別に問題じゃない。

問題なのは、そこに居る奴らが、異常を異常と思わないという異常。

最低でも、楓が卒業するまでの3年間はここに滞在することになっているのだ。

楓のためにも、そして自分のにも、この学園を少し調べてみる必要があるな。

「集団催眠かけられたりしてな」

「催眠術でござるか？それなら拙者も一度見てみたいでござるなあ」

その予想は、あながち的外れでもなかったということをし、のちに知ることになる。

学園を調べ始めて、早数日。

女子中等部に通っているロボットについて調べた。

わかったことは、何者かによる情報及び技術提供によって2001年に作られたということ。

楓と同じクラス、さらにロボットの開発者自身も同クラス。

あと、同クラスの外人の少女に付き従っているということ。

あとは、何故かいくつかの武装が搭載されていること。

それ以上はいくら調べても出て来なかった。

そして深夜、

次に、世界樹について調べるべく、まずはその歴史を知るために図書館にやってきたわけなのだが……

「あぶっ」

タライが落ちて来たり。

「ちよっ」

矢が飛んできたり。

そして、『力チッ』

「うっ、埋まる！埋まるうううう！」

本の雪崩に巻き込まれたり。

くそう……気を張って無いと、いきなりには弱いんだよなあ。
奇襲に弱いってのは、かなり致命的なのだ。

「痛つつつ……ったく、いたいなんんだこの図書館は！」

「なんなんだはこちらの台詞です」

突然声が降ってきた。

見上げるとそこには、

「あ、紐パ「見るなですっ！」ぶっ」

7話

深夜。

ゴールデンウィークを使って、図書館島に合宿に来ていた私達。
立て続けに聞こえる、罾の起動音と悲鳴。

「痛つつつ　　ったく、いったいなんなんだこの図書館は！」

続いて聞こえる怒声。

周囲を確認すると、気づいたのは私一人。

好奇心が恐怖心を上回り、恐る恐るそこへ向かった私がみたものは……

「なんなんだはこちらの台詞です」

本の山に埋もれている、忍者　　のコスプレした不審人物、

「あ、紐パ「見るなですっ！」ぶっ」

もとい、地べたに這いつくばって、私のスカートの中を覗く変質者でした。

「いきなり踏むなよ」

乙女のスカートの中を覗いて、踏まれるだけで済んだことを、

「そんなことされたら、気持ち良くなっちゃ　　いや、嘘です！冗談ですからっ！やめっ、本の角はやめ」

『ガッ！ガッ！ガッ！ゴスッ！』

「ふう……悪は滅んだです」

まさか踏まれて快感を得るタイプの変質者だとは思いませんでした。

と、こんなことをしてる場合では。とりあえず、ハルナ達を起こして、

「人一人殺しかねない勢いで殴っておいて、なんて清々しい笑顔してやがる」

「なっ！いつの間にうしろに「ま、悪い夢だったと思って寝てなよ」……はうっ」

背後から肩に手を置かれ、それに気づき振り返えろうとして覚えているのはここまで。

「目が醒めたら、本に埋もれていたのは自分だった、と？んー微妙だなー。まあ、とりあえずネタ張にメモっとくよん」

「寝ぼけてるの、ゆえー？」

「変な夢やな」

「夢なんかじゃないですっ！」

気づけば本の山に埋もれていた私は、とりあえず三人を大声で呼び起こしたです。

私の話を聞いて、全く信じる気が無い。というより、未だ寝ぼけている様子の三人。

「それよりですね……」

早くこの本の山から私を助けて欲しいのですが……

本に埋もれた少女と愉快な仲間達を、物陰から見つめる怪しい人物。

その怪しい人物とは……まあ俺なんですけどね。
へ、殴られた恨みに本の山に埋めてやったぜ。

「ふう、大丈夫みたいだな。しかし危なかった、一般人に見つかる
とはまだまだ俺も甘い」

それにしても、私事だからって気を抜き過ぎたな。しかも、仕事
着姿（忍装束）を見られるとは。

まあ全くバレて無いようで安心したし、世界樹についての本も手
に入れることが出来たからよしとする。

良く良く見れば、あの子達って楓と同じクラスだったような……
まあいつか、とりあえずは寮に戻ろう。

「世界樹ノ全テ」、ね。なんかそのままのタイトルだな、オイ」
なにになに？

『世界樹とは、学園の中央に聳え立つ、正式名称“神木・蟠桃”
こと。』

樹高270mという世界に類を見ない巨木なんです。』

「世界に類を見ない巨木、ね。そんなのここに来るまで見たことも聞いたことも無かったのはなんでかね？」

さらに読み進める。

『その正体はなんと魔法の樹だったりするわけです。22年に1度の周期で木に蓄積された魔力は最大となり、世界樹を中心とした6箇所に強力な魔力溜まりを形成。』

この魔力溜まりが作用し、世界征服だとか、億万長者になりたいという、即物的な願いは叶わないんですが、周囲に居る人の心に作用し、その願いを叶えてしまうという力を持っているんですよ。怖いですねー？』

「心に作用して、願いを叶える？どういう意味だ？」

『そして、次に世界樹の力が発揮されるのは再来年。』

世界樹伝説って知ってますか？

世界樹の力が発揮される日が学園祭の最終日にあたるため、学園祭の最終日に世界樹の下で告白をすると必ず成功するという都市伝説があるんですよ。というわけで、気になるあの子に告白するなら3年後がチャンスですよ？』

さつきから思ってたけど、この本やたらくだけた書き方してあるな。どんなヤツが書いたのか見てみたいわ。

そんな感想を抱きページを捲ると……

『まあそんなこんなで、世界樹について書き記しちゃいましたけど、実はこれって禁書相当の内容なんですよ。なので』

「なので、ここまで読んだら爆発するように細工しておきます。こ
ういうの、一度やってみたかったんですね。B y・食う寝る・3
ダース？って、この本光って！？」

そこまで読むと、“世界樹ノ全テ”が光を放ち始め

「って、こんな場所で爆発したら俺以外にも被害が……やらせるか
あああ！」

窓を開け放ち、本を振りかぶった俺は空に向かって全力投球。
そして

『ドーン！パパーン！』

と、気の抜けた爆発音と共に空に描かれる刹那の芸術。

「って、花火かよ！」

そりゃ、確かに爆発は爆発かもわからんが。ちゅーか、禁書相当
とかいうなら、あんな誰でも見つけられそうな場所に置いとくんじ
やねえよ。

ちっ、俺をビビらせてくれたお返しは必ずしてくれるぞっ、食う
寝る3ダース！

どこからか、

『フッフ、たのしみですねえ』

とかいう声が聞こえた気がした。

8話

2001年6月某日

中間テストも終わり、その結果に一喜一憂する間もなく、麻帆良祭への準備が始まった。

「つて、20日で足りるのかね？」

我が3 Bは、先ほどの帰りのホームルームにて、休憩所を作ることが正式決定した。

「知らないの？休憩所は人気の出し物なんだよ」

とは、俺の前の席に座る、3 Bの麻帆良祭実行委員かつ、クラス委員長でもある佐藤の言葉である。

休憩所が出し物かどうかは置いておくとして、ざっくり言つと、畳を教室に敷き詰めるだけ。

「これなら準備にも時間がかからない上に、当番も置く必要が無いから、クラス全員が遊びに行けるってカラクリなんだよね」

だそうだ。

なんでも、麻帆良男子中等部に伝わる伝統の出し物らしい。

「麻帆良祭つて、学園祭みたいなもんなんだろ？この学園規模でやるなら、相当なもんが出来そうだな。で、どんなのがあるんだ？」

麻帆良祭について、麻帆良wikiで調べてみた。
wiki曰わく、

『麻帆良学園における学園祭の名称。
毎年6月に3日間かけて開催される。』

麻帆良学園都市内の学術機関が総力をあげて催す、学園都市としては世界的にも有数規模の超特大イベントであり、営利活動を許可された生徒達が激しい商業化を押し進めた結果、延べ入場者数約40万人にも上る一大テーマパークの様相を呈すようになっている。』

らしい。

でも、具体的に何をやるかまでは書いて無かったのだ。
転入してきた俺は、その辺りが全く無知なのである。

「ミスコンとか、ライブ……あと、“まほら格闘大会”だね！今年は、我が中武研部長の古菲ちゃんが出るから見ものなんだ！」
「我が？佐藤って、中武研だったのか」

あ、ちなみに俺は水泳部に入った。何故、水泳部かって？愚問だね、そこに水着があるからさ。

「おう、ジャッキーに憧れてね！あと……強いと女の子にモテそうじゃない？」

俺は佐藤を生暖かい目で見守りながら、

「少し照れくさそうにしながら話す佐藤を見て、こいつキメエと思つたものの、哀れだったので心の中に閉まつ「出てますから！しっかり聞こえてますから！」ておくことにした」

「この人、何事も無かつたかのように言い切りましたよ！？」

まったく騒がしい奴だ。いくら佐藤が強くなるうとも、

「この年の女の子ってのは、顔に騙されてコロツといったちまうもんなのさ。でも、こんな事実は色々可哀想な佐藤には黙っ「ちゃんと、聞こえてますからねえ!」ておくのが良いだろうと思った俺は、それを口に出すことはなかった」

「そんな事実は知りたく無かったよ!」

俺はなんて友達思いなんだろう。佐藤も、感動の涙で前が見えないに違いない。

「あんたには言われたくねえよ!見た目完全にアウトだろ!特に、その牛乳ビンの底みたいな眼鏡!」

ふ、甘いぜ佐藤。

確かに今の俺は、ギャルゲ主人公みたいに目の辺りが前髪で隠れて見えない+ぐるぐる眼鏡(伊達)をかけているがな、それは仮の姿よ。

その気になれば、彼女の1人や2人出来るんだぜ!多分な……出来るよね?ね?

あー、ごほんごほん……それにぐるぐる眼鏡は、お隣を陰からマモル感じの忍者も愛用の品なんだぞ、馬鹿にするんじゃない。

「つーわけで、俺は佐藤よりマシなんだよ」

「いや、どういっわけだよ」

「じゃあ俺は水泳部の方に行くから」

「あ、ああ、また明日。って、僕の突っ込みはスルーですか!?!」

水着姿の女子高生＆女子中学生が俺を待っているのだ、お前なんぞに構っている暇はないのだ佐藤よ。

麻帆良祭当日。

『ちよつと、その兄ちゃん天津まだー？』

『俺の肉まんセットまだ来て無いぞ！』

『すいません、注文いいですかー？』

「あーはい！ただいまお持ちします！」

何故か、中華屋台にてウェイターをやっていた

水泳部は特に出し物という出し物をする事は無く、まるで派遣社員のように各部に貸し出されるそうだ。

この、貸し出しによる人件費が、来年度の水泳部部費にあてられるらしい。

そんなわけで、例に洩れず俺もすっかり派遣社員の1人と化し、こき使われることになったわけなのだが……

「なんでこんなに客が多いんだ！」

今年度開店したばかりで客は少なく、楽が出来るだろうと思ってこの店を派遣先を選んだというのに、とんだ計算違いである。

今だって、展開しているテーブルの数じゃ足りずに、席に着いて注文出来るまで1時間待ちだとか。

「こんなはずでは……」

「只野先輩、ボヤク隙があったら動いて」

「わかってるって!」

俺と同じく派遣されてきた後輩の声に急かされ、出来上がった料理を取りに行こうと振り向き、

『ドンッ』

「うおっ」

「きやつ」

一緒に派遣された後輩　水泳部期待のエース（スタイル的な意味でも）、大河内アキラにぶつかった。

「うわ、大丈夫か?」

「大丈夫。先輩、もう少し気をつけて」

「ご、ごめん」

「頑張つて、先輩なら落ち着けばちゃんと出来る」

「はい……」

何故か、『中1のガキに説教されるとか、俺の立場がねえだろ!』と突っ込む気にもならず、言われるがままに大人しく頷いてしまった。

なんだこの全てを包み込むような包容力。こいつ……出来る!

「ププ、アキラより年上なのにシノブは情けないアル」

「全くネ。そのトロさ、とても楓の兄とは思えないヨ」

「へ、ほっとけ」

「クー、超さん。そういう言い方は良くない。先輩はやれば出来る子」

「やれば出来る子で」

後輩に、やれば出来る子扱いされるとか悲しい過ぎる。
つか、超はなんで俺が楓の義兄だと知ってるんだ。

「楓に聞いたヨ」

「そうかい。ついでお願ひなんだが、人の地の文読むのはやめてくれませんか？オーナー」

「しっかり働けば、そんなことしないと誓うネ」

「ちゃんと働いてるっての！さっきのはアレだ、ちょっと虚しくなっただけだ」

そう、なんで俺ウェイターなんかしてるんだろうと思っただけさ。
しかも、自分の懐に入らないお金のために。

あ、そうか。忍者なんだから、影分身で影の方にやらせれば俺遊べるじゃん……って、あれ？なんで、古菲と大河内の2人は俺を見て固まってるんだ？まさか、今の口に出しちまったとか？

いい歳こいて、自分のことを忍者とか思い込んでる危ない人とか
思われちゃったりしたんじゃ

「長瀬（楓）のお兄さん（アルカ）！？」「」

「はい、呼んだかね？」

「誰が？」

「俺が」

「誰のアル？」

「だから、楓の」

「「嘘だ（アル）！」「」

カナカナカナカナ……って、なんだこいつら。

「だって先輩と長瀬は似てないじゃないか」

「そうネ、楓の方がシノブより背も高いアルヨ！」

「待て、大河内はともかく、古菲は喧嘩売ってんのか？」

楓より背が低いことは密かに気にしてるってのに、遠慮無くえぐりやがって！少し傷ついちゃったぞこの野郎め。あ、女だから野郎じゃないか。

「喧嘩？望むところアルヨ！さあ、構えるネ！」

「無理だよ、古菲は凄く強いんだ。水泳部のくせに、毎日水着姿の女子を、いやらしい視線で眺めてばかりでプールに入らない先輩が適う相手じゃない」

「クーもアキラサンも、人の家庭事情について詳しく聞くのは良くないヨ。それに、戸籍上は確かに楓の兄となっていたネ」

「だっー、もう！俺のことはいいからお前ら仕事しろよ！っーか、超。お前何調べてんだよ！」

大河内がさり気なく嫌味が抗議っぽいことを言って来た気がするが、そこは華麗にスルー。

気疲れした俺は、先ほど思いついた通り、こっそり影分身と入れ替わって抜け出したのだった。

9 話

「さて、どこに行こうかな？」

楓は散歩部とかいう、ただ散歩するだけの部活に入ったと言ってたな。

『あとで散歩部見に行くから、どこに行けばいいか教えてくれ』
つと、楓にメールを送信。

昼飯はさっきの派遣先でつまんだからいいとして ん？

ベンチに腰掛け、一人黄昏ている少女を発見。しかもあれは楓と同じ麻帆良女子中の制服。

ぶつぶつ呟いて見た目とても怪しいのだが、なんだか興味が湧いたので観察してみることにした。

しかし、この子さっきから何を呟いてんだろつか？
もう少し近づいて、聞き耳を立ててみるか。

「……えない、あり得ない、あり得ない、あり得ない、あり得ない、あり得ない（ry）」

うん、アレだ。関わっちゃいけないタイプの人でした
けどこの子、最近どこかで見たような？ なんだったかな、確か携帯を弄ってる時に見たような記憶が…… あれは確か、

「そうだ、ちうだ！」

思い出せた喜びから、おもわず近寄っていたのも忘れて声に出してしまう。

すっげーイタイ感じの子かと思いきや、ところどころ毒を吐いたりして、なかなか面白いことを書く奴だったから珍しく覚えてたんだ。

確かネットアイドルだっけ？とか思い出してる時だった。突然置かれた手が俺の肩をガツチリ掴み、

「ちょっとこっちに来い！」

「痛っ、そこ痛いっ」

思わず怯んでしまう程の鬼気迫る“ちう”の迫力に、俺は無言を言わず路地に連れ込まれる。

“ちう”は、人目が無いか確認すると、俺を壁に叩きつけ、

「あんな大勢の人前で、なんてこと言ってくれてんだ！しかも指までさしやがって！」

「あれ？指差してたっけ」

「めっちゃくちゃ、さしてただろうが！」

「そうかすまん」

無意識にやってたんだな、それは悪いことをした。だけど、ちうはその返答が気に入らなかったらしく、

「『すまん』、じゃねえ！あー、クソっ！思わず反応しちゃったけど無視すりゃ誤魔化せたんじゃないか？」

「そうかもね」

「ああああ！不意打ちだったから思わず素が出ちゃった」

両手で頭をガシガシとかきながら、1人地団駄を踏むちう。
しかしあれだな。こうやって見ると、

「メガネの方が可愛いね」

「は！？ンなわけないだろーが！写真は画像修正に手間掛けてんだぞ、写真のが綺麗に決まってるだよ！」

「メガネをかけてるだけで可愛さ3割増しだ」

「聞いてねーよ！それに、お前みたいな奴に言われても嬉しく無いっつの」

あれ？俺の恋愛経験では、ここで好感度が上がるはずなんだが。
まあ、中学生の好感度が上がったところで全く嬉しく無いんだけども。

そんなことより、

「さっき、『あり得ない』を連呼してたけど、何かあったのか？これも何かの縁、俺が聞いてあげようじゃないか」

「き、聞いてたのかよ……ふん、別になんてことはねえ。ついでに、お前に話すほど仲良くもねー。私と会ったことは忘れる、以上。じやーな」

言うだけ言って、ひらひらと手を振りながら去っていく“ちう”。
しかし、ネットアイドルのリアル事情なんていう、暇潰しにはちよつと良さげなネタを手放す訳も無く、

「話してくれないと、色んな所にバラしちゃうぞ。長谷川千雨さん」
「
「なっ！」

さすがに聞き流せ無かったのか、動きが固まる。

「えーと、1 A出席番号25、学籍番号は……」

「え？な、なんでお前が私の生徒手張を持ってやがる！」

「企業秘密でーす」

ちよろつと、スツただけです。もちろん返すつもりでしたよ？

「なんで、カードなのに生徒手張っていうんだろっね？」

「知らねー！返せ！」

「あ、1 Aって楓と同じクラスじゃん。どんだけ、俺はこのクラスに縁があるんだよ」

今日だけで、大河内、超、古菲。そして、ちうこと長谷川。

それが聞こえたのか、訝しげな表情になる長谷川さん。

「楓？長瀬のことか？お前も、ウチの変人の仲間かよ……」

「変人の仲間かどうかはともかく、楓の兄のシノブです。忍と書いてシノブ。よろしく！」

「シノブだあ？アンタらどれだけ忍者好きなん……って、アンタ長瀬の兄貴かよ！」

失礼な。この名前は、忍者になる前からなんだよ。

お前からアンタに変わったのは年上だとわかったからか？なかなか殊勝な奴だ。相変わらず言葉遣いは悪いけど。

「それは置いといて、ほらさっきの話してみ？」

「ちっ……そのかわり話したらそれ返せよ、あと絶対私のことは喋んな！絶対な！」

そう言つと、長谷川は不機嫌を丸出しで渋々語り始めた。

「　　って、わけだ。ほら、ちゃんと話したんだから約束は守れよな」

「驚いたな……」

長谷川が語ったのは、この学園の異常さについてだった。

小学生の時からおかしいと思っていたが、それが今年になって限界を迎えたのだとか。

下は幼稚園児みたいなのから、上は人妻みたいなのに加え、留学生の異様な多さに果てはロボット。

特異な奴らをわざと集めたとは思えないとのこと。

「あ？」

「まさか、俺以外にこの異常を異常だと認識してる奴がいるとは思わなかった」

「へ？んじゃ、アンタも……？」

「この異常さに気づいてる俺の方が浮いてるみたいになってた」
「だよな！この学園おかしいよな！」

ようやく同志を見つけた喜びからか、俺の両肩を掴んで激しく揺さぶる長谷川。

うつすらと目の端に涙を浮かべている辺り、本当に嬉しいのだろうということが察せられる。

「良かった、この学園でまともなのは私だけだと思ってたぜ」

「え、ああ、うん。そうだ、まとも仲間ってことでアド交換しよう

よ。たまにはまともな人間と話さないと、頭がおかしくなりそうだね」

「ああ、別にいいけど」

長谷川（中１）のメルアドゲットだぜ！あれ？俺の携帯、年下しか登録されていないような……

それにしても、『だ、ぴょーん』なんて痛いキャラ作って、ネットアイドルやってる奴も充分まともでは無い気がするが、これは突っ込み待ちなんだろうか？

いや、あれは趣味の範疇に入るのか？

だとすれば特別、変人というわけでも

「携帯鳴ってねーか？」

「本当だ、楓からか。ちよっと電話出ていい？」

「別にいいけど」

好きにしろと言うように、手をひらひらさせる長谷川。

そんな素っ気ない態度をとりつつも、生徒手張もちゃんと返したからもう用は無いはずなのに、電話が終わるのを待ってくれるようだ。

「悪いね、んじゃ失礼して。もしもし、楓」

電話を取ると、もう何度となく聞き慣れた、少し抜けた感じの声が聞こえてきた。

『あいあい。メール見たでござるよ、散歩部に来るとか？』

「うん、そう。そっち覗きに行こうかと思って」

『しかし、ただ拙者達と散歩するだけでござるが……今はどこにいるでござるか？』

「それはまた名前通りな……今？えーと、ここは どちらへんだ
つけ？」

「ライブハウス近くの噴水広場の辺りだ。散歩部ならわかると思う
ぜ」

長谷川に向かって首を傾げると、面倒臭そうな素振りを見せながら、すぐに答えを返してくれた。

実は素直じゃないだけで、根は良い子なのかも知れない。口は悪いけど。

「さんきゅ、今はライブハウス近くの噴水広場『今のは誰でござるか』
場 え？今の？さっき知り合った女の子で、お前と同」

『ツー、ツー、ツー』

「じくラスの……ってあれ？切れた」

「もう終わったのか？」

「うん。ていうか、切れた」

「ふーん。アンタはこれからどうすんだ？」

「俺？俺はそろそ ツ！？」

なんだ、このプレッシャーは！

遠くからなのに、俺にのみ放たれるという高度な殺気の放ち方といい、プレッシャーの重さといい並大抵の相手では無い。

そして、どこか懐かしさを覚えるようなこのプレッシャー！。

「どうしたんだ？急に黙りやがって」

「奴が、奴が来るっていうのか！」

「はあ？何言ってんだ、アンタ」

呆れ顔の長谷川を無視し、プレッシャーを感じて後ろを振り返るとそこには、

「見つけたでござる」

奴がいた。

いつの間にか現れた、忍装束の長瀬に連れられ、一瞬にして姿を消したシノブ。

「なんだったんだありゃ。まさか本当に忍者？ありえねー」

先ほどの長瀬の姿を思い浮かべて、タラリと冷や汗が流れる。

「まあ、長瀬は寮に居る時もたまにあの格好で居るの見かけるし」

だが、長瀬が忍者だとしたら、あんなに分かり易い格好をするか？
忍者つてのは、もっとこく隠密つつーか、なんつつーか。とにかく、
長瀬みたいにバレバレ過ぎる忍者なんて居るわけが……いや、この
考えが長瀬の狙いだとしたら？

本当の忍者が、いかにも『私は忍者ですよー』って、格好してたら、
信じる奴なんてそうそういねーだろ。いねーよな？
とすると……

「あー、クソ！考えたって仕方ねえ、適当に何か買って寮に戻るか」
こつこつムシャクシャしてる日は、“ちつ”になって発散するに限るぜ。

そうと決まれば、適当に『超包子』、こんな店あったか？まあ、テイクアウトもあるみたいだしここでいいか。

「いらっしやいネ、何にするある力？」

「肉まんを3つ。って、超かよ」

「おや、誰かと思えば長谷川サンではない力」

超包子の屋台で買い物しようとした私を出迎えたのは、クラスメイトである超鈴音だった。

「はい、うちの肉まんは美味しいあるヨ。360円ネ」

「ああ、結構安いんだな」

「毎度ありネ。おかげさまで、あの通りテーブル席は埋まてるネ」

肉まんを受け取り、超のいかにもなチャイナ口調を聞き流しテーブル席の方を見ると、確かに満席状態でウェイターもウェイトレスも忙しく動いている。

そして、その中の1人に私の視線は固定された。

「あ、おい！アイツって」

「あの人、パツとしないが、実は楓のお義兄さんあるヨ」

「知ってる、さっき本人から聞いたしな。でも、なんでアイツがここに居る？」

あの高くも低くも無い身長、太っているわけでも痩せているわけでもなく、ぐるぐる眼鏡に、どっかのギャルゲーの主人公みたいな髪型の男。

どう見ても、先ほど居なくなったシノブだった。

「おや、既に知り合いだたある力。麻帆良祭の間、彼には水泳部か

らの派遣部員として、朝からウチで働いて貰ってるネ」

「朝から……？ずっとか？」

「ずっとネ」

ずっと？そんなはずはねえ、現にさつき私は会ったばかりだぞ。その証拠にシノブのアドレスはしっかりと携帯に登録されてる。

「アイツ、双子だったり兄貴か弟はいたりすんのか？」

「フフ、長谷川サンは彼のことか気になるのかナ？」

「んなわけねえだろうが！」

「照れなくてもいいネ、兄弟は楓しか居ないハズ。この前調べたから間違いないヨ」

「調べた、って……何してんだ」

「フフ」

ニツコリと不気味に微笑むだけで、何も言わない所が怖い。

だが、この超鈴音が言うのなら間違いないんだろう。つーと、さつき私が出会ったアイツは。

「生き霊？……はは、頭痛くなってきた」

10話

「へー、散歩部って意外と部員いるんだな。伊達に部では無いってことか」

「そうだよー」

「そうですー」

長谷川と喋っている途中に楓に攫われ、理不尽な暴力を受けたのが1時間ほど前のこと。

俺は、楓と双子の4人で、散歩部の散歩コースなるものを巡っていた。

ちんまい体で、一生懸命散歩部の活動内容を説明してくれる双子の様子は微笑ましく、兄弟の居なかった俺は兄のような気分だった。え？妹なら楓がいるじゃないかって？あれは、ダメだ。あいつは俺を兄として慕ってくれないからね。

「しのぶ兄は、何の部活にはいつてるんですか？」

尋ねて来たのは史伽。双子の妹の方で、大人しい子である。

「俺は水泳部だよ」

「えー？なんで水泳部？あ、わかった。女子の水着姿を見るためでしょー」

「ハハハ、バカダナア。ソナコトアルワケナイジャナイデスカ」
「シノブ、棒読みになってるでござるよ」

「やっぱりね！ひと目見た時から、しのぶ兄はそんな感じだと思ってたんだよねー。なんていうの？ムツツリ？」

こっちの、俺の本性をひと目で見抜いたらしいのは姉の風香。

見分け方は、やんちゃツインテが姉。大人しいお団子が妹といった感じ。

2人は楓のことを、『かえで姉』と呼んでいるらしく、楓の義兄である俺は、自動的に『しのぶ兄』という呼び名で呼ばれることになったわけだ。

お返しとばかりに、姉の方を鳴滝（強）、妹の方を鳴滝（弱）と呼んだら2人にキレられたので、捻ることなく名前で呼ぶことにした。結構自信があつた呼び名だけに、却下された時は驚愕を禁じ得なかった、とかいうのはどうでもいい話である。

「お、お姉ちゃん失礼です」

「そうだぞ、失礼だぞ！」

「え？だって史伽だって、同じこと言ってたじゃん」

「そんなこと言っていないですー！」

「酷いなあ史伽」

「え？えええ？嘘ですつ、お姉ちゃんの嘘ですー！」

「史伽まで、風香と同じこと思ってたなんて……絶望したっ！」

「わーん、かえで姉ー！しのぶ兄が史伽のこと信じてくれないですー！」

「こらこら、イジメはいかんでござるよ」

涙目になった史伽が、俺と風香から隠れるように楓に抱きつき、その史伽をニコニコしながら撫で、俺たちを諫める楓。そんなほのぼのした風景が、そこにはあつた。

それからしばらくして、

「お腹減ったー」

「そついえば、私もお腹減ったです」
「む、拙者もでござるよ」

気づけば時間は、もうすぐ19時というところ。晩飯を食べてもおかしくは無い時間だ。

「んー、じゃあどつかで食べるか？」

「もちろん、しのぶ兄が奢ってくれるんだよね？」

「お姉ちゃん！」

「シノブは結構稼いでるみたいでござるから、遠慮はいらないでござるよ」

「おい、奢るのは吝かじゃないが、お前が決めるなよ楓」

「気にしたら負けでござる」

「えつとねー、じゃあ何処がいいかなあ？」

「お姉ちゃん、最近出来たばかりのあの店はどうかかな？」

「ああ、あそこねー！」

そして、俺と楓が連れて来られたのが

「……超包子？」

「ここは確か、超の店だったでござるな」

「だよー！」

「他にも、クーとか四葉さんとかもいるですよ」

「ん、どうしたでござるかシノブ？顔が変でござるよ」

「違うよ、かえで姉。それをいうなら、顔がおかしい。だよ」

「それを言っなら顔色だよお姉ちゃん……でも、本当にどうしたですか？」

顔がおかしいのは、ほっといってくれ風香。そしてありがとう史伽、

お前が唯一の良心だ。

それにしても困った。テーブル席では、今も俺の分身体がせつせと働いているはず。

バレない内にどうにか

「あれ？あそこにいるのって」

「しのぶ兄がもう1人、です？」

「ハハハ」

隠す間もなくまさかの即バレ。

2人を手刀で気絶させて、寮に戻せば夢だったことにならないかな？よし、そうしよう。

忍者つてことが一般人にバレちゃマズいんだ。すまん、風香、史伽。

「何をするつもりでござるか？」

「放せい、バレるわけにはいかんだ」

手刀を放とうとした瞬間、その手を楓に止められる。俺は小声で楓に抗議するが、

「大丈夫でござるよ」

「何がだ！」

「2人には拙者が忍者だとバレてるでござるから」

「ああ、なんだ。それなら問題ないな……って、問題あり過ぎだろう！どういうことだ」

聞くと、忍装束を着ている楓を見た2人はそれだけで楓のことを忍者だと思った（間違っではない）ようで、たまに分身の術を見せては遊んだりしているらしい。ただし、3人だけの秘密というこ

とで。

バレてるってどういうことだと思ったけど、私服が忍装束の楓にそれ言ってもいまさらなのか？

そんな事に頭を悩ませていると、楓は続けて言った。

「なに、子どもがサンタさんを信じているようなものでござる。1人や2人にバレたところで、周りは信用せぬよ」

「お前何気に酷いな」

「はて、なんのことでござるかな？」

こんなことを言ってるけど、楓の2人に対する信用からくる言葉なんだろう、多分。

そんなこんなで、結局場所を変えた俺たちは近場のファミレスに。

「やつぱりしのぶ兄もかえで姉みたいに忍者だったんだ！」

「凄いですー！」

「内緒で頼むよ」

「大丈夫。2人は黙ってるでござるよ」

「うんうん、その代わり」

「デザートも付けて欲しいです」

「はいはい、わかってるよ。今日は好きなだけ食べな」

デザートくらいで、口封じ出来るなら安いというもの。

頼んだ料理が来るまでの間、俺たちは雑談をしていた。もっとも、話しているのは双子と楓だけで俺は聞き専だったけど。

“女三人寄れば姦しい”という諺があるが やれ、どこのスイーツは美味いだの、どんな服が流行ってるだの、出会いが少ないだの、良く話題が尽きない。

料理が運ばれて来ても、食べながらずっと喋っているのである。まあ楓は姦しいという程ではなく、相づちうったり話を振られた

ら応える程度だったけど。

「ねえねえ、しのぶ兄とかえで姉って血が繋がってないんでしょ？
なんで？」

「んー、それは拙者とシノブの2人だけの秘密でござるよ」

「えー、いいじゃん教えてよー」

「そういうのを無理に聞くのはよくないよお姉ちゃん」

さすが史伽、風香と違ってプライバシーという言葉の意味を理解している。

しかし史伽に窺められた程度で風香が諦めるわけもなく。

「だってさー、史伽は気になんないの？」

「気になるけど……」

「別に教えてもいいけどつまんないよ？」

楓は2人の秘密とは言ってるけど、実際はそれほど秘密ということもない。

つい先日も、桜咲の追求を逃れられず（鬱陶しくなったからとも言っ）に教えてしまったし、他にも学園長あたりなら知ってると思う。

あ、超も知ってそうだな。戸籍がどうのこうの言ってたし、それにしても俺の戸籍は誰がいつ書き換えたんだろうか？里長がやってくれたのかな　って、話がそれ過ぎたな。風香が頬を膨らませテーブルを叩いて催促してくる。

「俺が10歳の時に親に捨てられて、それを拾ってくれたのが楓の親だったんだよ。んで、養子にしてくれたのさ」

というのは設定で、本当はなんだかわからん間に異世界の日本に

飛ばされて、楓（8歳）に拾わた、なんて痛々しくて恥ずかしくて
言えないっ。

「へー、そうだったんだ。結構ハードな人生なんだあ」

「子どもを捨てるなんて許せないです」

「これも人にベラベラ話すことじゃないから内緒な」

スイーツが運ばれて来たので一端口をつむぐ。楓は何故か不満そうだったけど、特に何も言うつもりは無さそうだった。

父ちゃん、母ちゃん、勝手に酷い親にしてすまん。本当は普通に育ててくれた両親だと思ってる。

「でもさー、なんで名字が違うの？」

「あ、そうです。養子になったんなら、名字も長瀬になるんじゃない？」

「む、言われてみればそうでござるな」

「それは……あれ？」

スプーンを動かしながら風香、続いて史伽、さらには楓も疑問付をあげる。そして、答えようとして自らも回答につまる。

こちらでの俺の扱い、つまりは戸籍やら何やらが不明だったのは置いておくとしても、養子となっているなら、少なくとも名字は変わるんじゃないだろうか。

今までも当然のように、『只野忍』と書類には書いていたけど、ごたついた雰囲気が出たことはあったがその後は何の問題もなく通った。

「なんでだろう？ 里長が何かしたとか」

「養子になったとしても、名字が絶対に変わるわけではないのでござらんか？」

「そんなことあるのかな。まあ、不自由してないし別に問題無いや」

それに、あの里長なら何かやってても不思議じゃない。
なんだって、あの人は　　なんだか背中が寒くなってきたからこ
の話はやめよう。
ところで、

「あ、これ美味しいー！」

「こっちもですー！」

「あ、すまぬ。追加でこれとこれとこれ、あとこれも頼むでござる」
「お前らはどんだけ食べる気だ！」

「「「デザートは別腹でござる（だよ）（ですー）（「「「

テーブルいっぱいに所狭しと並べられたスイーツの数々を見て俺
は溜め息を吐いた。

お金、おろして来た方がいいかなあ……

11話

2001年8月某日

夏休み。

俺は真面目に宿題を消化していた。

成績なんて気にしなくとも、エスカレーター式で進学出来るこの学園。

宿題ブツチして成績に影響しようともなんら問題は無い。しいて挙げるなら、2学期に先生の小言+補習が待っているくらい。

とは言っても、日中は水着鑑賞くらいしかすることも無いし、深夜になるまではバイトも無い、ゲームもやり飽きた。

ついでに言えば、2学期明けてから、わざわざ補習なんて受けるのも面倒だったので、無駄な時間を過ごすのも勿体ないということで宿題を消化していた。

「つと、これで全部終わり」

課題をカバンに仕舞い、屈伸を1つ。窓の外に目をやると、丁度陽が沈んでいる所だった。

「この季節は陽が沈むのが遅いな、もう7時過ぎか。今日は警備の日だし、外で食べるのも悪くないな。その前に、と」

シャワーを浴び、忍装束を着込む。これの上から黒のTシャツに黒のジーンズに着替える。服をシュバツと投げ捨てると、いつの間にか着替え終わってるアレだ。実はこういう地味な仕込みをしているのだ。

もこもこしないのかつて？それはどうにかなるんです、忍者だからね。

「う、あちい」

寮を出れば当然のように待ち構えている熱気。冷房の効いた空間に居ただけに余計に熱く感じる。

早くも滲み始めた汗を腕で拭おうとして気づく。

「あ、メガネ忘れた」

学校に行く時は常にかけているが、私用で外出する時はかけ忘れることもある。まあいい、メガネを掛けて無い時の弊害は、知り合いに会っても全く気付かれない、声を掛けられないことくらい。

「だと言うのに、何故キミにはバレるのかな？」

「フフ、天才だからカナ」

夕食に選んだのは超包子。麻帆良祭の日にここで働いてからというもの、しょっちゅうこの店を利用していたりする。

カウンター席に座り、料理を待っている俺に声を掛けてきたのは、自称じゃ無く真正銘の天才児である超鈴音。

何故かコイツ、そして大河内にはバレるから謎である。ちなみに大河内曰わく、『同じ気配だからすぐわかる』だとか。いったいお前は何者なんだと小一時間問い詰めたい。

「働かなくていいの？」

「私はオーナーだからネ。それに、今日は手伝うほど忙しくないヨ」

「ふーん、そんなもんか」

「隣失礼するネ」

「どうぞどうぞ」

それから超と麻帆良都市伝説やら麻帆良七不思議といった、くだらない雑談しながら夕食を取った。

「ぷはー、食った食った。美味かったよ」

「それは良かった。でも、五月に直接言ってやるともっと喜ぶネ」

「そうだな、んじゃ俺はそろそろ行くわ」

四葉にお礼を良い、財布から金を出して支払いを済ませ、超に別れを告げる。

気付けばもう22時。

あと1時間もすれば仕事の準備を始めなければいけないが、食後の運動にプールでひと泳ぎするのも悪く無い。

それに、この時間ならプールにはもう誰も残っていないだろう。

シャワーを浴びたのにこの暑さでそれも無駄に。汗を流しておきたいというのもあって俺は屋内プールへと向かった。

「まだ来てない、か。珍しいこともあるものだ」

時刻はもうすぐ23時というところ。

いつもなら私より早く来ているはずのシノブさんの姿は無い。

なんだかんだ言いながらすっかり仕事はする人だから、遅刻、ましてやサボることなどは無いと思うが、何かあったのだろうか。

「電話でも……ん、メールが来ているな。龍宮か？」

F r m :

S b : 桜咲刹那さまに重大なお知らせ

近衛木乃香さんはお預かりいたしました。

無事に返して欲しければ、下記の場所までお一人でお来し下さい。

場所は

「なん、だと……まさか!？」

私は走る。

これが悪質な悪戯の可能性だってある、まずはこれが本当かどうかを確認しなければならぬ。

そうして向かった先は女子寮、目指すは643号室。このちゃ…

…木乃香お嬢さま、そして相部屋の神楽坂さんが住む部屋。

部屋を訪ねて、そこにお嬢さまが居れば問題はない。しかし、もし居ないとすれば……そんな不安を抱えながら、私はノックやドアチャイムを押すというマナーを無視して蹴破るように643号室に踏み込んだ。

「木乃香お嬢さま!」

「え? ちよっ」

部屋を見回しても姿は見つからず、トイレにもお風呂にも気配は無い。

「木乃香お嬢さまはどこですか!？」

「木乃香？木乃香なら19時くらいに電話がかかってきて、部屋から出て行ったけど……っていうか、いきなりなんなの？」

「くっ」

先ほどのメールの内容を思い出す。

『無事に返して欲しければ、下記場所までお一人でお来し下さい。場所は 』

そこに向かえば、お嬢さまは居るはずだ。誰がどのような思惑があつてこんなことをしたのかはわからないし興味も無い。

良いだろう。これが畏だろうとなんだろうと、要求通り一人で向かつてやる。

しかし、お嬢さまに指一本触れてみる。その時は生きていることを必ず後悔させてやる。

私は、指示のあつた場所に全力で向かいながら、そう決意した。

「あつれー、電話通じ無いなあ。遅刻の言い訳しようと思ったのに」

携帯電話をポケットにしまい、走るスピードを若干上げる。

普段泳がずに鑑賞に徹している分、久しぶりにプール入ったら無性に泳ぎたくなり、気付けば1時間経っていた。

更衣室のシャワーでざつと流してすぐに着替えるも、桜咲と待ち合わせしている時間は既に10分経過している。

「まずいなあ、ガミガミ怒られそうだ」

ちっちゃいことは気にしないっていう俺とは違って、桜咲は真面目だ。あの歳であんなに頭堅くて疲れないのかね。
それにしても、と夜空を見上げる。

「今日は良ーい満月だ」

夜も遅いというのに外が明るいのは、街灯のお陰だけでは無いだろう。

こんな日だから、いつも通り何もありませんように。

「そつえば、超が言ってたな。学園都市伝説の一つ、“満月の夜に出る吸血鬼”だっけ」

空に浮かぶ真ん丸お月様を見て思い出すのは、超が教えてくれた都市伝説の話し。

なんでも、学園都市には満月の夜に黒いボ口きれを纏った吸血鬼が出るとか。

そつえばあの時、超が妙なことを言ってたな。

『　　という、都市伝説があるヨ』

『ふーん、満月の夜に出る吸血鬼ねえ。会ってみたいもんだ』

『吸血鬼に会って、いったいどうするつもりネ？』

『どうって……別に。そうだな、捕まえて見せ物にでもするとかどうだ？』

『ナルホド。でも、それがシノブに出来るカナ？』

『無理だなー。もし遭遇したら、しつぽ巻いて逃げ出すね。一目散に』

『それが良いネ。それでなくても、彼女はシノブに興味津々のようだからネ。捕まったら何をされるかわからないヨ』

『はは、怖い怖い。つっても所詮は都市伝説だしな』

『フフ、本当に伝説だと良いがネ』

思い返すと怪しさ満載である。

「本当に居る可能性もなくは無いんだよな。あの超が、意味あり気に言うのも気になるし」

もつとも、超が俺を怖がらせようとして“彼女”だとか、“吸血鬼が俺に興味津々”だとか、真実味を持たせるように吹いた可能性も否めないわけだが。

「ま、鬼がああ程度だったわけだし、もし吸血鬼が居たとしてもたいたことないっしょ」

「ほう？それは聞き捨てならんな。私をああ低級共と同列に扱うとは良い度胸だ」

「いやいや、自分で言うのもなんだけど結構強いほうだと思……え？」

声が降ってきたのは街灯の上。

そこには、満月を背負い黒い衣に身を包んだ

「どれほどのモノか見せてもらおうか、只野忍！」

金髪の少女が居た。

12話（前書き）

前回の投稿から1ヶ月以上経過。やること多くてやんなっちゃう。

そして、書き終わってみれば殆どまともに戦ってないという驚愕の事実。

感想とか貰えると励みになりますです。

あとがきに、12話裏 掲載

12話

「どれほどのモノか見せてもらおうか、只野忍！」

どこで知ったか俺の名前を呼ぶのは、街灯の上に立つ黒い布を身に纏った金髪の少女。

それを確認した俺は、

「つて、反応しろ！」

華麗にスルーした。

だって、なんか面倒くさい感じがしたから。

「桜咲出ないなー。怒ってるのかな」

「ふん、桜咲か。奴は来んぞ」

「メール入れとくか」

「人の話を聞けっ」

街灯から飛び降りながらのライダーキックを繰り出してくる少女、ヒラリとかわす俺。

「えーと、とりあえず……」

「話を聞け。さもないと、桜咲がどうなっても知らんぞ？」

「なんですかキミは？こんな時間に子どもが一人で外を出歩いてはいけないですよ」

「ふん。ようやく話を聞く気になったか」

「じゃ、注意はしましたからね。それでは」

シュタツと片手を上げて、ごく自然にその場を立ち去　　れなか

った。

「馬鹿にしているのか貴様は！」

「ったく、なんだよ。用事があるなら手短に頼むよ」

「なあに」

少女が目の前まで歩いてくる。

「すぐ」

そして、俺の左手を手に取り、

「終わるさ」

瞬間、俺は地に這っていた。

「おお？」

何が起ったのかは至極簡単。

左手を捻りあげられ、膝の裏に蹴りを入れられ膝カックン状態になったところに、腕の関節をキメられて地に這わされた、ただそれだけ。

だが、その『ただそれだけ』を知覚出来ない速度で行われた結果が

「今の俺の状態ってわけだ」

未だに地に這わされたまま、口の中に入った砂利をぺっぺっと吐き出す。

「この程度も避けられんとは、期待外れだな」

少女は追い討ちをかけるように、後頭部を潰さんばかりの勢いで蹴りを落とした。

少女に押さえられていた『俺』が煙のように消滅、本体の俺は街灯の上に移動。

「何を期待してたか知らないけど、ちよろつと懲らしめてやんないとダメみたいだな」

「ほう、いつ入れ替わった？気づかなかったぞ」

とは言っただものの、よくよく視ると、この少女、うつすらではあるが人間じゃ無い気配を感じる。

となれば、学園外からの侵入者の線が濃厚だ。まさか、学園内に学園長みたいな、化け物がそう何人も居るわけじゃあるまいし……いない、よね？

そうなると思を張ってなかったとはいえ、俺が侵入を感知出来ない程度にはデキる奴。という、あまり歓迎出来ない結果に行きつくわけだ。

だが、

「どこかで見た気がするんだよな」

「余所見をしている暇があるのか？」

「喰らうかよつ、るあああああ！」

少女が放つ背後からの鋭い蹴りを左腕で受け、右手の螺旋丸を少女の横っ腹に撃ち込む。

「ぐっ……うっ」

回転しながら数メートル吹っ飛んだにも関わらず、ボロボロになった少女が、ふらふらと立ち上がった。

「割と本気でぶち込んだんだけど、それで立ち上がるってのはどういうことかね」

「クク……少しはやる気になったようだな？」

口の端に滲ませた血を拭いながらニヤリと笑う金髪の少女。

「やる気になったというか、やらざるを得なくなったというか」

襲われた時の癖で、つい反射的に螺旋丸出しちゃうんだよ。

っていうか、キミ下着丸見え。いや、モロ出しなんですけど。あ

あ、俺のせいかな。

「どこを見ている！-」

「ロリに興味は無いんだが、しいて言うなら下着？」

「黙れっ、誰がロリだ！-」

どこを見てるのか聞かれたから答えたのに黙れとか酷い。

それにどう見てもロリだし、事実を事実のまま言っただけが……いや、なんでもないです。視線が痛いんです。

「吸血鬼をナメおって！ふざけた口を聞けなくしてやろっ」

「吸血鬼？ただのフラスコが……っ」

自称吸血鬼の少女が、ボソツと何かを呟きながら放ってきたフラスコが弾けるやいなや、氷の礫となって襲ってきた。

魔法か？しかし、こういう魔法の発動は初めて見る。魔法を使う

にも色々タイプがあるってことなのかな。

.....

.....

.....

「ほら、まだまだ行くぞ！」

次々と液体の入ったフラスコを放ってくる吸血鬼。
離れていると氷の礫が、近づくとき受け流され組み伏せられる。

小太刀を出してはどっかに飛ばされ、分身を出しても各個撃破、
気弾を撃ってはぺいっと手だけで弾かれる。

「はあはあ.....」

「どうした？吸血鬼程度どうにか出来るんじゃないのか？」

そう思っていた時期が俺にもありましたよ。あの量産型鬼と、
この金髪吸血鬼とじゃそれこそレベルが違う。

今の俺じゃ勝てる気がしない。

「仕方無い。こうなったらあの手を使うしかないか」

「ほう？まだ何かあるのか。いいぞ、やってみろ」

「言ってる！いくぞっ」

そして、最後の秘策を成功させるべく煙玉を地面に叩きつけた。

煙幕が晴れた先から出て来たのは4人の只野忍。全員が、気を圧縮させたであろう気弾を両手に構えている。

分身の完成度、身体能力の高さは評価は出来る。分身した上でソレを使えるのにも驚いた。が、

「馬鹿の一つ覚えだな」

「ただの馬鹿の一つ覚えかどうか、試してみろよ」
「はっ、もとよりそのつもりだよ」

4人の只野が一行となって向かってくる。さながら、ジェットトリームアタックという感じに。

私は、魔法の媒介であるフラスコを前方に放った。

「当たらないっての」

「ふん。当てなかったんだよ、コゾー」

計算通り避けさせる。隊列はさすがに崩れんか、まあいい。
本命は……

「足っ！？」

コゾーが1発目を避けた先に向かって、既に放っておいた魔法がドンピシャで発動。見事に足を取られた1人を、さらに魔法で追撃。直撃を喰らったコゾーは、煙のように消滅した。

「気弾を使う暇も無かったな？」

残り3人も同じように、いたぶり分身の2人も消滅させる。残った本体は満身創痍の姿で木々の中へ逃げ出した。

だがそれも続かない。体力が尽きたのか、ついに地面に崩れ落ちた只野忍。

「限界のようだな」

「……………」

ボロボロの状態、まさに虫の息という奴だ。私としてはここまで痛めつける気は無かったが、まあ仕方あるまい。

「では、貴様の血を頂こうか」

「………… お前、本当に吸血鬼なんだよな？」

「今更臆したのか？ そうさ、私は真正正銘の吸血鬼。それも、ただの吸血鬼ではない、吸血鬼の真祖だよ」

吸血鬼の真祖という言葉に、只野忍は再びを口を閉ざした。

ここ《麻帆良学園》で夜間警備をしている以上、裏の世界に関してそれなりに精通しているはずだ。ならば、吸血鬼の真祖が何を意味するか嫌でも理解出来るはず。

フフ、さらに脅かしてやるか。

「吸血鬼を侮ったことを今更後悔しても遅いぞコゾー？ 貴様の血を吸い尽くしてやる」

まあ死なせる訳にもいかんしほどほどにはするがな。と心の中で付け足す。

そうして只野忍に馬乗りになり、一番美味しそうな首筋に顔を近づけ

「吸血鬼、ね。そうか、そうか。なら……こついつのはどうかな！」
「おい、こら！貴様つ、ええい離さんかつ」

そう叫ぶと、只野忍は私に組み付き、というか抱きついてきた。
同時、それまであった地面が無くなる。完全に油断していた私は重力に引かれるまま落下し、そして

「これっ、落とし……馬鹿っ、あつ、あつ、アアアアアッ！」

秘策を成すべく、煙玉を地に叩きつけた俺は、それを目眩ましに即座に印を切って分身を4体作り出し、気配を断って戦線から離脱した。

「ふう……どうにか誤魔化せてるみたいだな。さて、と」

懐から携帯を取り出し、目当ての人物のダイヤルをプッシュ。すぐに電話は繋がった。

『もしもし』

「もしもし、学園長ですか？俺です、只野忍です」

『ほ、忍くんか。こんな時間にどうしたね、何かあったかの？』

何も無いのにこんな時間に学園長に電話する物好きなんて居ないだろ。とは、言わないでおく。

「はい。吸血鬼って、どうやって倒せばいいんでしょう？忍者の俺でも出来そうな手段知りませんか？」

『吸血鬼？はて、なんでそんなことが知りたいんじゃない？』

「それが、警備中に自称吸血鬼に襲われまして」

『……もしかして、ちっこい金髪の吸血鬼か？』

「ええ、まさか良く出るんですか？」

『（エヴァンジェリンの奴何をやっておるんじゃない………）』

「学園長？」

今何かぼそりと言わなかったか？まさか、その吸血鬼の正体に心当たりでもあるのだろうか。

『いや、なんでも無いわい。そうじゃな、ワシの知り合いが実際に使ってみて効果が絶大だった方法なのじゃが……』

「ふむふむ、ありがとうございます。それでは」

学園長が教えてくれたのは、さる高名な魔法使いが、悪名高い吸血鬼を仕留めた時に使った罠とやらだった。

教えて貰っておいてなんだが、その罠って、魔法のマの時も魔法関係ねーじゃねえかと思ったのは秘密である。

それはさておき、次は罠に使う道具を用意しなければいけないわけだが、こんな時間に融通が効く人物と言えば……

『おや、こんな時間にドウしたネ？』

「あ、オーナー？俺、忍だけど。急ぎでちょっとお願いがあるんだ」
『フム、聞こう力？』

「至急、玉ねぎ50玉、ネギ50本、にんにく100個欲しいんだけど」

『ハ？』

「だから、玉ねぎ50玉、ネギ50本、にんにく100個欲しいんだけど」

『ウチは八百屋ではナイのだガネ……』

そんなことはわかっている。でも、俺の知り合いで、緊急でどうにしてくれそうなのはコイツくらいなんだよな。

「そこをなんとか」

『……わかったネ。その代わり代金とは別二貸し一つアルヨ?』

「さんきゅー、じゃあ配達場所は……」

これでオーケーだ。

あとは学園長から教えて貰ったとおり、落とし穴を掘ってその中に玉ねぎ、ネギ、にんにくをぶち込み水を流し込む。あとは、地面を偽装して……なんだ?こんな時間に電話が掛かってくるなんて、誰だろう。

「もしもし?」

『あー、私だ。長谷川』

珍し、くもないか。最近良く掛かってくるし。

「ちうか」

『だから、そう呼ぶなって何度言えばっ……!』

「悪い悪い。で、何?今ちよっと忙しいんだけど」

『ったく。忙しいならいいんだ、用件はいつものだったからよ。忙しい時に悪かったな。じゃ』

ツーツーツー……

また、自分のクラスの愚痴か。最近頻度が増えてきてるな、長谷

川の精神が心配だ。

それはさておき、やっと完成した！

この間、わずか1時間ちよつと、ジェバンニも顔負けの仕込みのスピードである。

なに？懲らしめるとか言っておいて、人に頼ったり、罠を使ったりするのは汚いって？

狡い、汚い、卑怯は忍者にとっては褒め言葉なんだ。気にしないで欲しい。

あとは、分身が罠まで誘導するのを待って

.....

.....

.....

「これっ、落とし……馬鹿っ、あっ、あっ、アアアアアッ！」

「いまだ分身体、螺旋丸で玉ねぎとネギどにんにくをミンチにするんだ！」

気分はポ モンマスター。以心伝心なので別に口に出して命令する必要は無かったが、勢いというかノリというか。特に気にしないで欲しい。

分身体は、吸血鬼から手を離すと水面に向けて螺旋丸を発射、見事ミキサーに掛けた後任務を果たしたと言わんばかりに消滅した。

「ひっ、ひいひい！臭っ、わぶっ、口に入っ」

「どうやら効果は抜群のようだな、吸血鬼！」

「ぺっ、ぺっ！やめっ、助け……卑怯っ、だぞ！」

だから、狡い、汚い、卑怯は褒め言葉だと言ったでしょうに。聞いてない？知らんがな。

ほーら、にんにくと玉ねぎをもつと増量してくれるわ！ちなみに、鼻栓してるので俺への被害は皆無だ。

「がっ、がぼ……だずげ……でっ」

「負けを認めるなら、助けてやらんことも無い」

「みどめるっ！みどめ、る、がら。はや……ぐっ！」

吸血鬼とはいえ、見た目がまるっきり少女なのだから若干心は痛む。

息も絶え絶えな吸血鬼を落とし穴から引っぱり上げた時には、既に気絶していたらしく、学園長に連絡した俺は、逃げるように警備へと戻った。

だって、近くに居たら服に臭いが移りそうなんだもん……

こうして、麻帆良学園に来て初めての激闘(?)は幕を閉じた。そう言えば、桜咲がどうのこうの言って無かったっけ？まあいか、桜咲のことは給料に含まれてないもんね。

12話（後書き）

12話裏

指示された場所にあったのは、木で出来た一軒の家。
私は扉を蹴破るようにして、その家に踏み込んだ。

「お嬢様っ！」

「ほえ？せつちゃん？」

「こんばんは、桜咲さん」

「良かった、ご無事で……それに、絡繰さん？」

どういう訳か、テーブルで向かい合い、呑気に2人でトランプを
しているお嬢様と絡繰さん。

「意外と、早かったですね……」

「まさか、あなたがお嬢様を？……ということですか？事と次第によ
っては」

「びっくりしたわーせつちゃん、どないしたん？」

「え、いや。その……」

絡繰さんに問い詰めたいのに、お嬢様がいらっしゃるためにそれ
が出来ないっ。

そう私が齒嚙みしていると、

「私がお呼びしたのです」

「茶々丸さんが？」

「はい、ですよね。桜咲さん」

「あ、や……ぐ、そうです」

お嬢様が害されている様子はない、ここは絡繰さんの言葉に合わせるべきか。

「へー、せっちゃんと茶々丸さん仲良かったんやねー」

「はい」

「と、ところで、お嬢様はこんなところで何を？」

「ウチは、茶々丸さんに晩御飯に誘われて……あ、そうや。明日奈に連絡するん忘れとったわ！ちよっと、電話してくるー」

お嬢様が席を外された今がチャンスだ！

「申し訳ありません」

「まだ、何も言っていないませんが……？」

「あのような方法が一番あなたを呼び出し易いと思ひまして」

私を呼び出す？私を呼び出して何をするつもりだったのか。

「一体何が目的なのですか？」

「目的はあなたでは無く……」

「では、やはりお嬢様を！」

「いえ、それも違います」

警備担当の日に、私を呼び出し、その目的が私でもお嬢様でも無いということとは

「只野さん……？」

「お待たせー、今日は泊まるって明日菜に言ってきたわー。せっちゃんも泊まるんよね？」

お嬢様がもう戻ってきた、というかこんな怪しい所に泊まらせんよ？

「いや、私はっ」

「はい、桜咲さんも泊まります」

「絡繰さん！？」

何を勝手に決めているのですか！

「良かった、今日は久しぶりに話ししような？こつちに来てからあんまお話し出来なかったもんな」

「で、でも」

「ほら、せつちゃんもこつち来て一緒にトランプしよ？」

ぐ、お嬢様をこんな場所に一人で泊まらせるわけにはいかないっ。これはやむを得なくです、仕方ないのです！
だから今日だけ、今日だけ……

13話（前書き）

久しぶりに書いたら、短い上に超のキャラ、口調が怪しくなっていた。目につく箇所があれば教えて頂けると幸いです。

13話

2001年10月某日

「今度、大格闘大会なるものがあるらしいでござる。」

楓の口からそんな言葉を聞いた、とある土曜日の午後。

午前で授業を終えた俺達は、久しぶりに2人で街に出た。その帰り、晩御飯にと超包子に寄った時のことである。

「大格闘？何それ」

「なんでも、学園内の格闘技経験者達がかき集められて、優勝すると賞金100万円が貰えるとかなんとか」

「100万？100万か……ふふ、100万あればアレとコレと……ふふふ」

主に、新型のパソコンやらゲームやら、家電やら、欲しい物はいくらでもある。

ちよつとした小金持ちになったシノブの浪費癖は止まる所を知らない。

なに？毎月100万近く稼いでるだろって？それはそれ、これはこれ、だ。

お金はあつて困るものじゃない。

「しかし、何かしら格闘関連のサークルなり、部活なりに入っていないと参加資格は無い上、途中入部が可能なのは1学期までの間でござるから」

「参加出来ない、と？」

「うむ」

「そんな……せつかくのボーナスが」

一般人コマして、100万という美味しい話しが転がってるのに、参加資格が無いという事実には絶望していたそんな時。背後から声が降ってきた。

「フッフ、どうやらお困りのようだネ！」

「オーナー？」

知る人ぞ知る、麻帆良学園始まって以来の天才、怪しい中国人？こと、超鈴音だった。

って、待てよ。気配感じなかったぞ？

「超、どうしたでござるか」

楓も気配を感じ取れなかったためか、若干警戒気味。その証拠にいつもより目が細いや、なんでも無いですよ楓さん。だから、テーブルの下で足を踏むのはヤメテ下さいiiiiiiiiiii！

「ドウやら、大格闘大会に出たいみたいダネ。で、シノブはどうしたのカナ？様子がおかしいガ」

「なんでも無いでござるよ超。な？」

「はひ、楓さんの言うとおりでござるますですよ！」

楓の、のほほんとした顔（の裏に隠された忍としての本性）を見慣れている俺はつい条件反射という名の本能で肯定。

「？まあいいが、大格闘大会に出たいのダネ？」

「待て待て。ナチュラルに会話に入ってこようとしてるけど、さっきまでこの場に居ませんでしたよね！？

人の話を盗み聞きでもしてたのかお前は」

「失礼ナ、偶然通りがかっただけヨ。聞きオボえのある声がしたと思つてネ。それに、今はまだ盗聴器のスイッチは切っているヨ」

「なんだ、そつかー。って、普通にスルーしそうになったけど、今は、ってなんだよ今は、って！」

まるで、本当に盗聴器仕掛けて　え、マジで？

「……………（ニコニコ）」

「……………」

「……………」

よし、俺は何も聞かなかったさういうことにした。楓も異論は無いようだ。

「で、格闘大会に出る手段があるのか？」

「聞いて驚くがイイ！」

ムンツ、と無い胸を張る超は高らかに言い放った。

「入部出来ナイなら、作ればいいネ！」

そう高らかに宣言した彼女の腕には、【おーなー】と書かれた腕章が輝いていた。

そんな話を、していたのが一週間前。

そして今。

俺は割れんばかりの歓声に包まれる舞台に立っていた。

気のせいかな帰れコールも混じっている気がするが、そんなことは
琐事。所謂、気にしたら負けというアレ。

黒地に、【現代忍術研究部】と書かれたロングのＴシャツに、ジ
ーンズ。

それと、顔を隠すための覆面をつけている。祭りとかの出店で売っ
ている仮面みたいな奴だ。

『さあ、ついにこの大格闘大会もこれが最終試合となってしまいま
した！』

舞台上上がってきた司会の少女が、さらに盛り上げるために改め
て対戦者の紹介を始める。

『学園内の、並みいる腕自慢達を真っ正面からバッタバタとなぎ
倒してきた、中武研の若き部長、古菲選手！本当に中学生なのか！
？』

「ほつとくアル！」

『対するは、驚くべきことに対戦相手がことごとく辞退したため、
ここまで不戦勝で勝ち進んできた、正体も実力も不明のダークホー
ス忍研のハットリ（仮）選手！その仮面はウケを狙ってるのか！？
スベってるぞ！』

「うるせー、ハットリくん馬鹿にすんな！」

忍者と言ったら、ハットリくんだろうが。もしくは、うずまいた
り、たまごだったり。

司会も、会場がヒートアップして来たのを感じ取ったのか、口上
を早々に切り上げる。

『それでは、盛り上がりも最高潮に達してきたようですので、最終試合に相応しい闘いを見せて頂きましょう！Ready・・・Fight！！』

そして賞金100万円を巡る最後の闘いが、いま始まる。

13話（後書き）

いやね、お前どんだけ放置してるんだと。

今さら需要は無いでしょうが、こんな作品を待ってくれてる物好きさんのために、これからはちまちま書いて生きたいなー（希望）

しばらくは文章のリハビリが必要だと思うので、文がおかしくてもゆるーく訂正して頂けると嬉しいです。

14話（前書き）

大格闘大会後編

14話

ここ 決勝の舞台 に来るまで、それはもう運が良かった。

対戦相手が何者かの闇討ちを受け負傷し辞退したり、急に体の痺れを訴え病院に搬送されたりといった感じに、運良く謎の不戦勝に恵まれたからだ。

やっぱり日頃の行いが良いからだと思う。

目の前の古菲も大人しく不戦敗してくれば良かったのだがそう簡単に行くわけも無い。

闇討ちするには中途半端に強いいため手加減が出来ず大怪我をさせるおそれがあり、薬を盛るほどの隙も無かった。

ああ、何故そんなことを知っているかという疑問は胸にしまっておいて欲しい。

搦め手が効かない以上、正々堂々やるしかない。やるしかないのだが、

「刃物は使えないんだよなー」

クナイも手裏剣も使えない、人の目もあるし気を使う事も出来ない。

純粋な体術による勝負。

だが、そんなハンデを差し引いても、この体はチート過ぎた。

「行くアルよ！」

『おっと、始めに仕掛けたのは古菲選手！』

素早く距離を詰めてくる古菲の突きを余裕を持ってかわす。
せめて、一撃で終わらせてやるのが古菲のためにもなるだろう。

「だから」

軽くワンステップ前に飛んでから、着地と同時に古菲の鳩尾を貫
手で貫く。

「お休み」

「っ!？」

貫手を引いた瞬間、古菲はその場で崩れるように倒れた。
忍であるならば全てが一撃必殺であれ、とは里長の言葉だ。

『中武研部長古菲選手！ハットリ（仮）選手の一撃？（残像しか見えなかったけど）で崩れ落ちました！まさか、これで終わってしまったのか!？』

成人男性が喰らっても三日は起き上がれない。

さすがに、点はズラしてあるが古菲もしばらくは

「ゲホッ、ゲホッ……ゆ、油断したアル」

『立った！立ちました古菲選手!』

「は?」

しばらくは起き上がれないはずなんですけど、このお嬢さんは
なんなのでしょうかね？

咳き込みながらも、ユラリと立ち上がる古菲を見て、仮面の下で
冷や汗が流れるのを感じた。

「この学園にこれ程の使い手が隠れて居たとは世の中広いアルな」
「えーっと、今の効いてなかったり？」

「いや、しかと効いたアル。中々の一撃だったヨ」

なら何故立ち上がれるのかと。

まあいいや、今くらいの攻撃でその元気なら、

「もう少し本気、出してもいいよな？」

「望むところネ！」

「後悔するなよ！忍法オラオラオラオラオラオラオラッシュッ！」

説明しよう！忍法オラオラッシュとは、正面から距離を詰め連打で攻める威力は無視した速さだけの攻撃なのだ！どこに忍術の要素があるかは秘密である。

と言つても、一般人相手に使つて良い技じゃ無いのだけど。
念の為に言っておくが、決して何かに憧れたわけではない。

あと、無駄無駄アシールド！とかの防御技もあるが、それはまた別のお話して。

突然だが、俺の体術には型というモノが無い。別に忍者だからというわけでは無い、忍者にもきちんと体術の型はある。

ならば何故か？

理由は簡単。きちんとした体術など学ばなくとも、異常な身体スベックでどうにでも押し切れると知ってしまったからだ。

まあそれも、最近やたらと強い自称吸血鬼と出会った為に考え直す必要があるやも、とは思っているのだが。

ただそれでも、一般人レベルでのかなりデキる程度の人間に俺のオラオラッシュを防ぎきれるわけが

『捌いている！古菲選手、ハットリ（仮）選手の目にも止まらぬオラオラッシュ（笑）を捌いているぞっ！』

「こんな見掛け倒しの攻撃、効かないアル！」

「ちいっ」

「お返しするネ！」

おそらくは、拳法の型の一つ。避けることも出来るが、せっかくの格闘大会決勝、観客を楽しませるために、あえて攻撃を受けて効かないアピールするのも悪くな、

「いっ！ゴパアッ！？」

「まだまだ終わらないアル！」

『今度は古菲選手のラッシュ！ラッシュ！ラアアッシュ！ハットリ（仮）選手は避けられない！』

「ちょ、待つ「ガッ」痛い！「ゴッ」痛いって！「ゴスッ」ぐふっ……」

『ダウン！ハットリ（仮）選手は古菲選手の猛攻の前にダウン！』

痛い、ちょー痛い。中国拳法ナメてた。なんか、体の中からちょー痛い。

『このまま10カウント以内に起き上がらなければ、古菲選手のKO勝ちということになります……ハットリ（仮）選手、驚くべきことに古菲選手のあの猛攻を受けてなお立ち上がりました！』

「古菲、てめえは俺を怒らせた」

主にオラオラッシュを見掛け倒しと言ったこととかな！

「そつちが本気でやらないからネ」

「そんなに本気がご所望なら、見せてやろつじやないか！ハアアアアッ！」

封じていた気を解放し、全身に巡る気は髪の毛を逆立てる。おそらく常人にもうつすら白い闘気が見えるはずだ。

ちなみに、将来的にはスーパーな変身をあと4回は残している予定。

『こ、これは凄い！という仕掛けか、突如ハットリ（仮）選手を包むような白い半透明の何かが現れました！まさか気なんてモノが実在するのでしょうか！』

「む、むう。これはちよつとマズいアルな……」

「後悔しても遅い。喰らえつ、これが俺の全力全開ッ！忍法オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオーッシュッ（強）！」

「がががが……かはっ」

『避けられない！これは避けられない！古菲選手ダウン！最強とも思われる中武研部長をここまで圧倒する人間が居ると一体誰が想像していたでしょうか！ハットリ（仮）選手、アンタは何者だーッ！』

全然忍術使つてないけど忍者です。

俺は気を纏った拳で、それはもうドン引きなくらい古菲をフルボッコしまくった。

とは言っても、本当に全力全開でやったら規格外の古菲と言っても流石に死に兼ねない、それでも五分くらいの力は出したのだ、

『古菲選手！またしても立ち上がった！って、古菲大丈夫なのアンタ！それ腕折れてない！？』

「ク、ツ、ハア……だ、だいじょぶアル」

それなのに、何故こいつは立ち上がるのか。

「この学園に来て、お主のような本気で戦える男に巡り会えたこと感謝するネ」

「それはどうも」

「良かったら、お主も中武研にどうアル？」

「生憎俺は今の部活が好きなんだ、遠慮しとく」

『えー、両者でなにやら話していたようですが私にはさっぱり聞こえませんでした！しかし、古菲選手の様子を見る限り、次が最後の一合となると見て良いでしょう！』

だって、毎日水着女子を堂々と鑑賞出来るような素晴らしい部活他に無いよ？

それより、

「もう立ってるのも限界だろ？安心しろ、100万は俺が貰ってる」

「賞金に興味はナイが、お主には興味が出て来たアル。私が勝ったら賞金をあげる代わりに、お主に一つ願いを聞いて貰うというのはどうアル？」

「勝つたらな。じゃあ、そろそろ」

「うむ……」

俺と古菲はお互いに構え、そして

俺と古菲の戦いはあの一合で終わりを迎えた。

んで、結論から言うと、勝負に勝って試合に負けた。

あの状態の古菲に、俺が負けるはずが無く当然、古菲との戦いは勝利したのだが、ここで大会運営側からの審議が入ったのだ。

『そもそも、現代忍術研究部って格闘部なの？って言うか、部の発足人数足りて無いから、部として認められて無くない？』

なにになに？部の発足には最低条件として、最低5人の部員を必要とする？

よし、まずは点呼だ！。

「いーち」

「にー、でござる」

「……………」

「にんにん」

圧倒的に足りて無かった！

これは、超に異議申し立てをせねばなるまい。

てなわけで、やって来ました超包子。

「どういうことだ！話が違つてござるぞオーナー！」

「何がネ？てか、そのキャラ作りこそどうしたネ」

うつかり出ちゃっただけなのでスルーして欲しいのでござる。

「面倒クサイから手短に、かくかくしかじかつてなわけなんだが」

「部の発足に人数が足りずに、現忍研が部として認められて居なか

った。とシノブは言っているでござる」

「え？今の通訳必要な流れじゃなくね？」

「フム……」

これじゃ俺が『かくかくしかじか』で話が伝わると思っている、
変な人みたいじゃないか！

「そのキャラ作りは、楓と被るから変えた方が良さそうネ」

「いや、もうその話はいいですからっ」

「そう力？私は参加する方法を教えたダケで、部を作る手伝いをす
るとは言ってナイヨ」

「うぐう」

確かにそれはそうである。これが八つ当たりと言ったことも理解し
ている。

でも、それでも俺は、

「お金が欲しかった！」

「毎月しっかり稼いでるクセに、まだ欲しいアルか？」

「当然だっ！って、え？なんでオーナーが知ってるの？」

「聞きたいの力ナ？」

「……………」

人間さ、知らない方が良いことってあるよね。

「むう、超はシノブが何をしてるのか知ってるでござるか？」

「当然ネ」

「……………」

即答されるとどう反応すべきか困るんですけど。それはもう切実に。

あれ？楓はどうして心なしか俺を睨んでるのかな？かな？

「おい楓、腕を掴んでどうするつもりだ。待て、その関節はそっちには曲がらなギャーッ！」

.....

.....

.....

というわけで、俺は勝負に勝ったにも関わらず不正参加ということになり古菲が優勝。

賞金も古菲の手に渡った。

ところで、古菲が勝った際には賞金を貰う代わりにお願いを一つ聞くという話だったのだが

「不本意だが、私の優勝となてしまったアル」

「まあ、不正参加になったんだからしょうがないさ」

「これ、賞金の１００万ネ」

「え？本当にくれんの？本当に本当？貰っちゃうよ？返さないよ？」

「その代わり、一つお願いがあるアルネ」

「あるあ……？あー、中武研に入るってのならパスね」

「それはひとまず諦めたネ、ハットリ（仮）、お主、私のムコ（候補）になて貰うアル」

「は？」

「私、結婚するなら自分より、強い男とキメてるネ」

うん、目の前でもじもじしながら喋ってる古菲は気づいて無いけ

ど、なんかさつきから俺の背中にザクザク刺さってる。視線とかじやなくて物理的な、そう、例えばクナイだとか、棒手裏剣みたいな。さて、ここに居たら古菲まで巻き込み兼ねないしね。100万はここに置いて、と。

「さらば！」

『ボフィン』

と、地面に煙玉を叩きつけ煙幕に紛れる俺。

この隙に、ヤツから逃げないと俺の身が……手遅れだった。

14話（後書き）

別に古菲との最後の戦いは思いつかなくて逃げたわけじゃないんだからねっ！

本当は13話と合わせて一つで載っけるつもりだったんですけどねー。どこかの誰かが放置していたもので（オイ

あと、3、4話やったらそろそろ原作開始時に突撃予定。

15話（前書き）

ヨ夕話。

完全に作者の妄想に突っ走ったお話。

楓可愛いよ、楓。

15話

2002年3月某日

クリスマス？そんなモノはこの世から無くなりましたよ。

初詣？そんなの、軽くトラウマですよ。

バレンタイン？楓に殺されかけましたよ。

そんなわけで、今回はとある日常のどうでもいいお話。別に、適当なネタが思いつかなかったってわけじゃないんだからねっ。

その日も、俺はいつもと同じように授業を受け、いつもと同じように部活に顔を出し、いつもと同じように女子の水着姿を堪能していた。

「何をしているんですか先輩？」

「見てわからんのか、愚かな後輩よ」

「はぁ……また、セクハラですか」

「セクハラ？違うな、これは」

女子生徒達の成長（もちろん肉体的な意味で）を暖かい眼差しで見守るという崇高な、

「長瀬に言いつけますよ」

「おい、大河内何をしている。喋っている暇があったら泳ぐぞ！」

「はぁ、私は休憩だから」

そんな俺を見て大河内は溜め息を吐いた。

この水泳部期待のエース（あらゆる意味で）大河内は、最近よろしく無いことを覚えた。

きっかけは、楓が大河内に部活での俺の様子を聞いたのが原因のようだ。

そして、楓に俺の部活での様子がバレて……ガクガクブルブル、思い出すだけで3回は死ねる。

それ以来、俺が楓に弱いことを知った大河内はことある事に楓の名前を出すようになったのだ。

「大河内つてさ、酷い鬼畜だよね……」

「鬼畜じゃない。先輩が正しい道を歩けるように教育してるだけだよ」

ある意味裏の道を堂々と突っ走る職業なんですけど！とは、言いたくても言えない。

「教育なら保健体育の実技が望ましいな。是非、手取り足取り教えて頂きたい！」

「そうか、じゃあ水泳をしよう」

「盲点だった……」

そういえば水泳部って水泳の実技する所でしたね、すっかり忘れてましたよ。

ん？でも、水泳を手取り足取りってことは、色んな所が密着してウハウハな……いやいや、何を考えているんだ俺。大河内は中1なんだぞ？だが、あのスタイルは

そこですぐさま脳内緊急会議が始まり、そして、

「よろしく願いしまっす大河内、いやアキラ先生っ！」

賛成票10、反対票0で可決されました！良心？理性？そんなモノは東京湾に重石つけて沈めてやりましたよ。

可愛い女の子と同意の元、水着で触れ合えるんだよ？拒否する理由があるなら上げてみる、ことごとく却下してやる！

「先輩、何か邪な気配を感じるんだが」

「アハハ、気のせいですよアキラ先生。僕、煩惱のぼの字も持ち合わせて居ませんから」

「それは余計に怪しいよ先輩」

「それより、俺泳げないんだ。バタ足の練習するから手を持って先導してくれよ」

泳げない振りして抱きついたりなんていう、キャツキャツウフフな展開が俺を待っている。

「別にいいけど……それならどうして、水泳部に入っただ？」

「泳げるようになるためだ」

「それなら尚更練習しようよ……ちょっと準備してくるから待っていてくれ」

「はいアキラせんせい」

冷静になって考えてみれば凄く恥ずかしい光景である。

だって、（中身）良い歳した男が中学生に手を引かれてバタ足の練習をしているのだから。

だが、今の俺にはそんなこと関係無かった。

何故なら、目の前で揺れているのだ。何が揺れているのかはあえて言わない。

「バチャバチャ」

「その調子だよ先輩」

「バチャバチャバチャバチャ」

「うん、そろそろ手を離してもいいかもしれない。じゃあ離すよ」

そう、この時を待っていたのだ。その自己主張の激しい、全てを包み込むような母性で俺を受け止めてくれ！

「うつ、沈む！沈むうう！おーぼーれーるーブクブクブク」

「先輩！」

目を瞑って空気を吐き出し、わざとじたばた暴れ自らが沈むように仕向ける。

むにゆり。

驚いた大河内が慌てて俺を抱き留め、俺は水着越しの母性を思いっきり堪能。

むにゆむにゆむにゆ。

腕をがっしりと大河内の腰に固定し、その母性に顔面を押し付け色んな意味で溺れる勢いだ。

「うわあああん、溺れると思ったよおおお」

「うむうむ、もう安心でござるよ」

「助けてくれてありがとう！でも、足が竦んでまだ動けないんだ。もう少しこのままでいいかな！」

「好きにするといいでござる」

「お前は天使だな！アキラちゃんマジ天使！」

ふはは、今この瞬間だけは大河内の胸は俺だけのもんだぜ！

「せ、先輩……」

少し引き気味の大河内の声が聞こえる。しかし、どうしてだろう？さっきから聞こえる声と比べて少し遠い。

っていつか、ござる？いやいや、幻聴でござるっ？

ギギギ、と恐る恐る顔を上に向けると、

「ニンニン」

ですよねー。

どうして楓さんがここにいらっしやるんでせうか？

「先輩が何か企んでそうだったら、長瀬を呼ぶように言われていたから」

「せ、殺生な！」

「シノブは甘えん坊でござるなー、もっと抱きついていいでござるよ？ほれ、ギューッと」

「ぐぁ」

極まってる！首に極まってる！けど胸気持ち良い！くそっ、これが本当のヘルアンドヘヴンかッ

「という、夢をみたんだよ」

気付くと俺は、楓と大河内と一緒に超包子のテーブル席に居た。

「そうでござるか」

楓はニコニコと俺の話に相槌を打つ。

ところで大河内、どうしてお前は俺から距離を取っているんだい？

「いえ、先輩がちよっとキモ、じゃなくて気持ち悪くて」

「酷くない？今の言い直したことによってより酷くなってない！？」
「ところで、ずっと疑問だったことがあるんだけど」

スルーですか？良いですけどね、もう最近こういう扱いもありかなーって、気持ち良くなってきましたしね。

ウフフフ、と遠い目をして烏龍茶を一口。

「只野先輩も忍者なのか？」

「ブフツ！」

「シノブ汚いでござるよ、ほら口を拭いて」

ふきふき、ん、楓ありがと。

って、なーにを言ってるんすかね、この子は。
とりあえず適当に誤魔化さないと。

「クスクス、楓さん今の聞きましたあ？この子良い歳こいて忍者が

実在すると思っけていますよ!」

クイツと、烏龍茶を再び一口。さっき吹き出しちゃって飲めなかつ、

「む?忍者は実在するでござるよ?」

「ブフツ!」

「うわっ汚い!先輩汚いつ!」

え?まさかのマジボケ!?ここは同意するところだろう!

なんで『何馬鹿なことを言ってるでござるか?』みたいな顔をしてるんだよお前は。

あと大河内さん、マジで傷付くんでもう少し控え目にしてくれると嬉しいっす。

「でも、それと拙者達が忍者かどうかは別の話でござる」

「ぞ、ぞういうごどだから。ゲホッゲホッ」

「よしよし」

気管に入ったせいで咽せちゃったよ。背中さすってくれてありがとう楓、呼吸が楽になったよ。まあお前が変なこと言わなきゃ、俺も咽せ無かつただけだね!

「え?でも長瀬は忍者じゃないの?」

「違うでござる」

「でも、良く忍者の服着てるよね?」

「楓エ……」

「それに双子が、2人は忍者だって言ってたよ。秘密だと言われのだけど」

おい楓、だから忍装束を私服に使うなと何度も言っただろうに。まさか双子の奴ら、『ここだけの話』とか『絶対内緒だけど』、とか言ってみんなにバラして回ってるんじゃない……最もバラしてるのは姉の風香だろうけど。

「ハハハ、コドモノザレゴトジャアナイカ」

「棒読みだよ先輩。それに、あの目は本当のことを言っている目だった」

「じゃあ忍者だと思い込んでるだけだ。これでどうだっ！」

「どうだって言われても……」

「仮に、仮にだぞ！仮にだからな！仮に、俺達が忍者だったとしてそれを知ってどうする？吹聴してまわるのか？」

「……どうもしない、かな？」

そうでしょう、キミはそんなことする子じゃないと信じていたもの。

「じゃあ結局知らなくていいんじゃないか？」

「言われてみればそうかも、うん。そうだね」

「だろ？じゃあ、このお話は」

「先輩が下手なりに必死に隠そうとしているってことは、きっと隠さなきゃいけない理由があるんだね。わかった、もう探らないよ」

終わりにしてそろそろ帰ろうか、って言おうと思ったのに、最近本当に冷たいですね！一年も経てば扱いも流石に慣れきってますねコンチクショウ。

「う、うん。でも、何故かな？これで一件落着のはずなのに胸が痛いよ」

「うむ、一件落着でござるな。さて、シノブ。夢の続きはどうでい

ざるか？今なら拙者の胸が空いてるござるが」

「は？何言ってるの？何が楽しくて義妹の胸を枕にして寝なきゃいけない『ブチッ』んだよ。そもそムギユ」

あれ、目の前が真っ暗だよ？でもなんだか柔らかい感触に包まれて不思議。心なしか良いかほりもするけれど、それと同時に意識薄れて行くのはなんでなの？

誰か教え

「長瀬、兄妹同士でそういうことは良くないんじゃない？……あ、でも、血が繋がっていないなら……ぶつぶつ」
「ほれ、ギューッでござるよギューッ」

あはは、なんだかお花畑が見えるー。
ガクッ。

「せ、先輩大丈夫なの？」

「シノブは昔から丈夫だったから、このくらいは平気でござるよ」

そしてボソリと楓は呟く。

「全く、いつになったらわかってくれるでござるかなあ」

15話（後書き）

クリスマス（12月） 今の所、そういうイベントで絡めるほどの仲良い相手が楓しかない。却下。

初詣（1月） 麻帆良に神社ってあるっけ？ああ龍宮神社があったけど、原作キャラがチヨイチヨイ出てきてやたら長くなった挙句煮詰まって投下が遅くなりそうな気がする。却下。

バレンタイン（2月） 結局楓のヤンデレオチに走る気がする。却下。

ホワイトデー（3月） バレンタイン関係やっとならば、ここに繋がるんだけど、バレンタインネタは今回やらない。却下。

結果、今回のとある日常の中の一幕となったわけですが、予定が変わらなければ、次回はエヴァ回かなー

16話（前書き）

いつの間にか前回から二週間も…

16話

2002年5月某日

4月を迎え、新しい学年になった。

エスカレーター式のため受験は形だけで終わり、俺は無事高校へと進学。

中学の時と特に代わり映えのしないそんな毎日を送っていた俺は、現在とある場所に招待されていた。

「一つ聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「ファンシーな物で溢れてるこのお家が、本当にあなたのお家なんでしょうか？」

「それがどうした」

「いえ随分と可愛い吸血鬼だなあと」

そう、俺は何故か、自称吸血鬼のお宅にお邪魔していた。去年の8月に俺を襲ってきた吸血鬼の少女である。いや、この場合、少女の姿をした吸血鬼というのが正しいかもしれない。

なにせ、彼女は600年以上生きているそうだ。

「エヴァンジェンさんは吸血鬼の真祖って奴なんですよね？」

「ああ、そうだが？クク、まさか脅えて「それがどうして、中学生なんかやって」聞くな！」

「えー？」

即刻却下されてしまった。

あれからしばらくして思い出したのだが、彼女は楓のクラスメートの1人だったのだ。ついでに、彼女に付き従っていたロボットの茶々丸さんも楓のクラスメートであり、この家で給仕のようなことをしているようだ。それにしても、メイドロボが実用化されているとは思わなかったな。

それとも、実はロボットのようできて魔法的な何かで動かしているのか？良くある、ゴーレムとかガーゴイルみたいな。

「気になるなー」

「なんだ貴様、そんなに死にたいのか？」

「あーいや、中学生やってる理由もそこそこ気になりますけど。茶々丸さんの方が気になったり」

特に体の作りとか。調べたところエヴァンジェリンさんはあまり成績良くないし、学校に通ってる理由はきっと勉強をやり直したかったとかそんなところだろう、うん。

「そこそこ……この私が中学生をやっていることがそこそこ……」

「じゃあ、すつごく気になります」

「だから教えんと言っているだろうが」

「……………」

こんのロリババア……不機嫌丸出しの返事をするから気を使ってやっただけのに。

教えるつもりが無いのに関心が低いことに不機嫌になるとかなんなのこの人？

「始めてエヴァンジェリンさんに会った時にも思ってたんですけど」
「なんだ？」

やっぱりエヴァンジェリンさんって、

「面倒くさい人ですよー」

「よし、殺す」

「うわあ、また面倒くせーこと言い始めたよこの人。面倒くせー」

「貴様っ、オモテに出ろ！生まれて来たことを後悔させてやる！」

すつと胸元に手を突っ込んで一言、

「実はこんなこともあるとかと、にんにくとネギのエキスを抽出した小瓶をここに用意してあります」

吸血鬼に抜群の効果を誇る、約100個分のにんにくとネギを甲賀忍の特殊製法で抽出した特別製エキスです。

「ぐっ、殺す、いつか殺す、必ず殺す」

両手をわなわなさせてギロリと睨みつけてくるエヴァンジェリンさん。ただし言葉とは裏腹にジワジワと後退している。

怖い、怖いよこの人。にんにくとネギが無かったら確実に死んだ気がするよ！

「と、まあ、冗談はここまでにして俺になんの用ですか？それともこれはただのお茶のお誘いだったんでしょうか？」

「ふんっ、誰が貴様なんぞを茶に誘つか」

私がコゾーを初めて見たのは、去年の4月。なんでも、若くして腕の良い忍者が来ると聞き、一目見てやろうかと思ったのだ。そして、鬼共と戦うコゾーを見て私は興味を持った、

『面白い技を使っていたな、少し遊んでやるか』

それから、私は次の満月の日を待ち　続ける間に、花粉症にかかった。

花粉は、容赦なく私を襲い、漸く花粉を意識せずに出歩けるようになった頃には既に数ヶ月が経過していた。

クッ、あの憎き花粉共め、許さん！許さんぞー！

数ヶ月後のある日、満月の夜、ついに私はコゾーと戦う機会を得る。

『ま、鬼があの程度だったわけだし、もし吸血鬼が居たとしてもたいたことないっしょ』

コゾーはあろうことが、吸血鬼の真相であるこの私を、低級の鬼共と同一視するというナメた真似をしてくれた。

コゾーに吸血鬼の真相の力を思い知らせるべく戦い、コゾーを追い詰めた私は　いかん、思い出したら吐き気が、寒気もしてきた……。

「おい、貴様一発殴らせろ！」

「え？」

「いくらなんでもあれは無いだろう、あれは！」

あの日から3日間、にんにくや玉ねぎの臭いが取れることは無か

った。学校も休み、家に籠もるもそれすら苦痛だった。
私は生涯あの怨みを忘れることは無いだろう。

「あー、話に全くついていけないんですが」

「黙れ！そして、大人しく殴られる！」

「んな無茶な……」

あの日から、既に半年以上経っている。季節も巡り、今は再び私が苦しむ季節が訪れている。

「なのに、なぜ今更、貴様を呼び出したかというところ」と

作者の都ご　　げふんげふん。

「貴様の血が欲しいからだ」

「あー、吸血鬼ですしね」

え？それだけで納得するのか？と思ったが、完全に疑いの目を向けてるな。ここは、それっぽいことを言っておくか。

「戦闘技術の未熟さの割に、異常に高い貴様の身体能力に興味がある」

「……本音は？」

「この前の仕返しに、動けなくなるまで血を吸って辱めてやりたい」
「帰ります」

「待てっ、冗談だ！」

というのは嘘だ、機会があれば虐め抜いてやりたいと常々思っている。が、ここで帰られては困る。

コゾーはしぶしぶといった感じで椅子に腰を降ろす。

「で、100歩譲って血を提供するとして、俺は何を得られるんです？まさか、タダってわけじゃないですよね？」

「当然だ。だが、お前は何が欲しい？私はお前の趣味なんて知らんぞ」

興味があるのはお前の身体、もとい血だけだな。

「お金、と言いたい所ですけど金なら学院長からいくらでも絞り取れるだろうし、吸血鬼ならではのトンデモアイテムとか無いんですか？」

コイツは私に何を期待して……ん？そうか、アレがあつたな。アレを使えばコイツなんぞ

「フフ、そうだな……良いモノがあるぞ」

「いや、笑い方が不吉過ぎて怖いんですけど」

「私に着いて来い、報酬の先払いをしてやる」

「あのー、やっぱり遠慮したいかなーって」

「茶々丸」

「はい、マスター。失礼します、只野さん」

それだけで茶々丸は言いたいことを察した。茶々丸はコゾーを後ろからガツチリと羽交い締めにする。

「おい、待て！放せ！いったい何をするつもりだっ！」

「申し訳ありません、マスターの御命令ですので」

うむ、やはり良い従者だよ茶々丸は。これに限っては葉加瀬や超

に感謝せねばなるまい。

「なあに、心配することは無い。ちょっとしたバカンスだと思えばいいさ」

埃を被っていた別荘^{アレ}を引っ張り出し、魔法陣に踏み入り転移。
そう、バカンスさ。もっとも、貴様では無く私にとってのだからな

「バカンス？つて、なんじゃこりゃー！」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！俺は奴らに家の地下に連れて行かれたと思ったら、いつの間にか辺りは見渡す限り海になっっていた！な、何を言ってるかわからねえと思うが（以下略）

「どうだ？ここは、私の別荘のようなものだ。ここで1日過ごしても、外では1時間しか経過していない」

それなんて精神と時の部屋だよ。しかも、リゾートっぽいし。フアンタジーすげえ。

「これをくれると？」

「さすがに、やるわけにはいかん。が、これを自由に使う許可をくれてやる。自分で言うのもなんだが、これはかなりの破格条件だよ」

まさか、リアル精神と時の部屋を見られる上に自由に使えるとは、

確かに破格な条件なのだろう。これは、修行フラグか……

「いいですよ、死なない程度に俺の血を上げます」

「死なない程度？ 貴様は何を言っている」

「え？ 何って」

「貴様の加減など知るものか、私が満足するまで血を吸いまくってやるさ」

「ハハハ、またまたご冗談を」

「言ったハズだぞ？ 『この前の仕返しに、動けなくなるまで血を吸って辱めてやる』と」

「やれやれ、このお嬢さんはコレの存在を忘れていらっしやるらしい。」

胸元から再びにんにくエキスを取り出し、エヴァンジェリンさんの目の前でブラブラとちらつかせながら、

「死なない程度にはあげると言ってるんですから、それで納得してくれませんか？ 出ないコレを」

ピキピキツ、カチーン！

「コレを、なんだ？ どうした、言ってみろ」

あれー？ なんでかなー？ 俺の左手が小瓶ごとカチーンコチーンてなってるー。

「って、ぬああああ！？」

「フフフ、どうかしたのか？」

「魔法はあのフラスコが無いと使えないんじゃない？」

「この中は外より魔力が充溢しているからな。この程度は造作も無

い」

そう言って両手をバキバキ鳴らすエヴァンジェリンさん。
出る！こんな危険な所一刻も早く出るっ！と、ここに来た時に使った魔法陣に向かったのだが、

「動かない……？」

「入ってから1日経たないと出られないようにしてあるからな」

「ということは……」

「本来の力には程遠いが……フフ、今の私から丸1日逃げ続けることが出来るかな？」

ふん、『出来る』か、『出来ない』かじゃねえ、『やる』のか『やらねえ』のかだ。

それでもって俺は、やる！

「へっ、やってやろうじゃないの！」

「そうじゃなくてはな　って、おい！」

俺はエヴァンジェリンさんに向かって正面から立ち向かう、わけも無く、背を向けて全力で逃げ出した。
そして

………

………

………

「ちうー……マズいっ！が、この身体中に気が満ちる感覚っ！これ

は
」

「あの、そろそろご勘弁を……」

「聞こえんな」

「そんなご無体な……」

いやー、負けた負けた！

5分も保たずにとっつかまって完膚無きまでにフルボッコされちゃいました。

外でさえ満足に合わないというのに、魔法を操るエヴァンジェリンさんに勝てるはずも無く、俺はされるがままに血を吸われ続けるのだった。

サボってたツケがまわってきたなあ。

もし生きてたら今度から真面目に修行でもしよう。

吸血されながら、固く心に誓

「ちうー」

「ちょ、ヤバい！もうヤバいっ……アーーーーッ！」

17話（前書き）

今回はちょっと短いです。
本編突入前の前編。かな

17話

あの日、エヴァンジェリンさんの別荘に連れこまれた俺はどうにか生還することが出来た。

別荘を使うことで、エヴァンジェリンさんの好意という名の修行（一方的に襲われるだけ）を繰り返した俺の身体能力は格段に上がっている！はずだ。いや多分上がってる、おそらく上がって、きつと上がってる、上がってたらいいなあ……。

はつきりしろって？だってしょうがないじゃないか。ジワジワと追い詰められた後は、毎回組み伏せられて血を抜かれるんだもの。物理的にボッコボコにされるわけじゃ無いから、超回復が働いて無い気がするんだよなあ。

まあそんな調子で月日は巡り、この学園に来て二度目の麻帆良祭も終わり、夏休みもあつという間に過ぎ去って、季節は秋。今年も再び大格闘大会が始まる。今度こそ、優勝して賞金ゲットだぜ！

「と俺の心は燃えていたのだった！」

「燃えるのは結構ですから、只野さんも仕事して下さいっ」

「まるで小姑」

「誰が小姑ですかっ、来ますよ！」

「はい、はいっ」と

桜咲に促されるまでも無く目の前に迫る鬼を小太刀で一刀両断する。うむ、今宵の雲水も良い仕事をしておるわ。

あ？何してるかって？久しぶりに侵入者の撃退なんぞをしております。

「目で追えるようになってからわかるようになりましたが、只野さんの太刀筋は滅茶苦茶ですね」

「ハハハ、こやつめ！褒めても何も出ぬぞ」

「褒めていません」

何故かな？俺に慣れた人達はみんな似たような態度をとるようになるのは。不思議でならない。

「只野さんが面倒くさい人だから、ですっ！」

「全くもって不思議だ、なあつと！」

「聞こえないフリをしても現実是不変わります、よっ！」

一体、また一体、と斬り伏せながら会話する俺と桜咲。最早、この程度なら慣れたものである。

「桜咲って、少しは齒に衣を着せた方が良い思ふの」

「ふう、大丈夫です。私がこういう態度を取るのは只野さんだけですから」

「え？それって、俺が特別な存在ってこと？」

「そういう所が面倒くさいんですよ」

溜め息を吐きながらうんざりした表情でポツリと呟く桜咲。

傷付かないと思っているかも知れないが、わりと傷ついてるからな！そりゃあもうガラスのハートだし、ひび入りまくりですよ。

「ガラス……プッ」

「人の心を読んだ上に、心から馬鹿にするのは止めていただきたいっ！」

「口に出ていましたけど」

「なんですとっ！　って、あれ？」

「どうかしましたか？」

「……ちよつと離れた所に知らない奴の気配が。それと、そいつを追ってる？気配がもう2つ」

しかも、追う方も追われる方もなんとなく知ってる感じの気配だ。追われてる方の気配はなんて言うか、日頃から慣れ親しんでる的なまさか……まあ、確認すりゃわかるか。追ってる方もどこかで会ってる気はするんだけどわからん。

「不味いですね。人払いの結果は張ってありますが、それでも稀に迷い込む人が居ますし」

「一応誰かが、追ってるみたいだけど味方って断言出来無いし……分身を向かわせるか？」

「はい、お願いします」

「はいよ、ニンニンっと」

印を切り、一体の分身を出現させる。持ち場を離れるわけには行かないので、こういった場合はこの方法で対処しているのだ。

「頼むぜ俺。追ってる奴がわからん以上、両方に気をつける」

「任せる俺。もし、逃げてる方が予想通りの相手だったら……」

分身は俺に向かって親指をグツと立てると、影の中に溶けるように消えて行った。俺もグツと親指を立てて分身を見送る。

「見る度に便利だとは思いますがし、凄い術ではあるんでしょうけど、只野さんが使うと凄く馬鹿っぽいのは何故なんでしょうか？」

「自分だって、テストの成績そんなに良くないくせに。この前の数学のテストだってギリギリ赤点を免れて」

「なっ、私は頭の良し悪しを言っているわけでは！というか、どう

して只野さんがテストの点数まで知っているんですか!？」

それはほら、楓の周辺情報を知っておくついでに色々……ね？
目を逸らしてわざとらしく口笛を吹く俺を、桜咲はジト目で睨み
つけるが口を割らないと察したのか話題を変えた。

「はあ……そういえば、追われている方に心当たりがあるような口
振りでしたか」

「うん。予想が当たってたら、桜咲も知ってる奴だよ」

「私が知っていて、魔法関係者じゃない　クラスの誰かですか！
？」

「予想の通りならね」

桜咲……学園内の魔法関係者じゃない知り合いって、クラスメイ
トしか居ないのね。寂しい子っ！まあ、俺も人のことは言えないけ
どさ。

「つと、懲りない奴らだね。そうまでしても、この学園には価値が
あるということなのかな」

呑気に雑談している間に、周囲には再び召喚されたであろう鬼た
ちがざつと二桁ほど。

桜咲は抜いていた刀を鞘にしまい、腰だめに構える。

「例えどんな理由があろうと、お嬢さまには指一本触れさせません
！神鳴流奥義　斬岩剣っ！」

ズバッ！

まさにそんな擬音が目に見えるかのような一閃。

桜咲の一撃は、まるで三　無双で雑魚敵を一掃した時のように、

鬼たちをまとめて吹き飛ばし宙に舞わせる。

「おーおー、お嬢さま愛されてるなあ。妬けちゃうね」

「なっ、何をっ！」

「んじゃ、俺も最近扱えるようになった新技を」

ウンッ！

掌に浮かべた気は薄い円盤のように広がると、やがて高速振動を始める。

「行くぞ　ナツパ避ける！」

ザンッ！

叫ぶと同時に投擲した気の円盤は、触れた鬼共を真つ二つにしながら空の向こうへと消えていった。こうしないと後処理に困るしね。その場に残ったのは、胴と上半身がおさらばした鬼だったものと、運良く難を逃れ目の前の光景に恐れおののく鬼だけ。

「バカめ、どういう技か見切れんからこうなるのだ」

「ナツパヨケロ……変な名前ですが、恐ろしい技です」

「あー、うん。そうね」

気円斬ってちゃんとした名前があるんだけどね。ほら、一応形式的には『ナツパ避ける！』は押さえとくべきでしょ。

「こっちはこれで片付いたかな？」

「そうですね、問題ないと思います」

後は他のエリアの担当者が片を付けるだろう。よっぽどのが無ければ応援も要らないはずだ。

それにしても、追われているのが予想通りの奴なら、ひと波乱ありそうな気がヒシヒシ　と、思ったら案の定か。

「悪い、桜咲。予想が当たったみたいだ。ちよつと行ってくるから、ここは頼む」

「待って下さい、私も行きます」

「えー？でも」

「只野さんが、ここにもう一体分身を置いていけば問題ないはずです！それに、追われているのがクラスの誰かなら余計に気になります」

「しゃーない、そこまで言っならわかったよ」

珍しく強情な桜咲に軽く疑問符を浮かべながらも、俺は渋々と分身の術を使うのだった。

やれやれ、ちよつとばかり長い夜になりそうだなあ

18話（前書き）

零の軌跡とか色々やってたらいつの間にやら…次回から本編辺りに
凸

18話

「それで追われているというのは誰なんですか？」

気配に向かつて走る最中、件の逃亡者について桜咲が尋ねてきた。分身は既に対象者と遭遇しているため正体はわかっている。

「麻帆良一の天才、超鈴音だよ」

「超鈴音？彼女が何故……」

「偶然迷い込んだのか、あるいは」

「何か企んでいる？」

個人的には、超包子のオーナーとして付き合いのある超鈴音。あいつは常に何かしら企んでいると思うけど……ん、そろそろか。

「まあ本人に聞けばわかるよ。んーと、桜咲はあっちを頼む。俺はこっち行くから」

「気配を追えるなら別れて探索する必要は無いのでは？」

まあ、そうなんだけどね。ちよつと、そういう訳にもいかない事情が出来たし、ここは適当に。

「それが、たつた今見失っちゃったんだよねー」

「見失っちゃったんだよねー、じゃありませんよ!」

「てへっ」

「どうしようもない殺意を覚えたのですが」

「そんなものはそこの狗にでも喰わせてしまえ。それより、早く見つけないと逃げられちゃうよ。ってなわけで、お先」

「あつ、ちよつと待っ」

という、声を背で聞きながら俺は木々の中に飛び込んだ。フリをした。それからしばらくして、

「どうやら撒けたようだな」

木の影に隠れて桜咲の背中を見送る俺。その後ろにある茂みから、さらに隠れていた超がしたり顔で出て来る。先行した俺の分身も一緒だ。

「撒けたようだな、じゃねーっての」

「静かに。見つかてしまうヨ」

「桜咲は既に離れてるよ、追っ手の2人も足が止まってる。しかしつくづく驚く技術力だなあ、オイ」

超が羽織るようにして身に着けているのは、光学式迷彩試作機なるハイテクマントらしい。発動は安定していないものの、一度発動すれば姿も気配も隠してしまう優れもの。

これがあれば今日からキミも立派な忍者だ！ちなみに、製作費は億だとか。

「一応中学生だったよね？」

「この世界ではそういう設定ネ」

「設定、ね」

「テストも兼ねての情報収集だたのダガ、全くマズいことになったヨ」
「せめてテストくらいは済ませておけよ」

「他の魔法先生達ならどうにかする準備は……いやはや、高畑センセが居たのは予想外ネ。学園に居る間はこの手の仕事はやらないと聞いてたのダガ」

「高畑センセってのはそれほどのモンなのかい？」

話したことは無いが、名前は知っているし、遠くからではあるが顔も確認した。だが、戦っている所を一度も見ることが無いのだ。遠目からでも、そこそこ出来るとは思っていたけどね。

「エヴァンジェリンさんには劣るだろうが、こちら 旧世界だけで無く、魔法世界を含めても間違いない最強クラスの使い手ヨ」

「あのー、聞き流し難いワードが出て来たんだけど。つか、良くそんな人から逃げられたな」

世界最強クラスだとか、旧世界だとか魔法世界だとか。

「迷彩があたからネ。そんなコトより、ワタシを捕まえようとしナイというコトは、依頼は受けて貰えると思ってても良いのカナ？」

依頼。

それは、俺と桜咲がこの辺りに到着する数分前のこと。一足先に超を補足した俺（分身）は、何故こんな所に超が居るのかと事情聴取していた。

『来るべき日に向けて、魔法関係者の戦力調査ヨ』

超はあっさりとその目的を吐いた。そして、さらにこう続けた。

『ワタシを見逃して欲しいのダガ。出来れば、見送りつきでネ』

それから考える間もなく、俺と桜咲が到着し、やむなく桜咲を遠ざけることになり、今に至る。

「逃げようとしなから捕まえてないだけかもよ」

「シノブの身体能力についてのデータは、既に茶々丸から得ている。ワタシでは、この補足されている状態からは逃げられナイヨ。ましてや、頼みの綱はこの通りネ」

頼みの綱こと迷彩マントはバチバチと火花を散らし、うつすらと煙も上げている。素人目にも再度使えるようには見えない。

それより、データってエヴァンジェリンさんの別荘でのアレのことか？ということは、いつもエヴァンジェリンさんにぶっ飛ばされて泣きを入れてる所も超にバッチリ知られている？

「絶望したっ！」

「？なんだか良くわからないが、まさに絶望してるネ。そういうワケでさっさとワタシを全力で逃がすヨロシ。全力で！」

絶対遵守しなきゃいけない不思議！とかいう冗談はさておき、俺が学園長から受けた依頼は、学園への侵入者を捕獲、排除すること。不審者は捕獲対象であるし、魔法を知らない人間も捕獲対象ではあるが、超は魔法のことは知っているようだし、学園の生徒である。

とすれば、依頼にはギリギリ反していない。か？

「まあ、黒に限りなく近いグレーゾーンだけど」

「結論は出たカナ？なら、早くするネ、幸い顔は見られてナイヨ」

「とりあえず結界の外まででいいよな？」

超はそれに頷く。オーナー（超）には散々世話になってるからな、ここらで借りを返しておかないと利息がとんでもないことになりそうだ。

超が何をやるつもりなのか、来るべき日とやらが何を指すのかは

知らない。しかし、万が一、魔法関係者に害を成すのが目的だとしても、楓に被害が及ばなければそれ以上干渉する気もない。

「ちょ、何す……んーっ！んーっ！」

そんなわけで逃がすための仕込みを終えた俺は、問答無用で迷彩マントを超に被せると、そのまま脇に抱え、早速人払いの結界を抜けるべく走り出した。念のためにお面をつけて

……

……

……

「この辺りまで来ればいいか」
「んーっ！んーっ！」

夜と言えば忍の得意とする時間。隠密には持ってこいである。当然、跡をツケられることなく、高畑センセとその他一名は撒いてきた。桜咲の方は、俺の分身が適当に話しをして、2人して持ち場に戻っているハズだ。

マントの下でじたばたする超に苦笑しながら、

「わかったわかった。今降ろ。驚いたな、危うく逃げられるところだったよ」っ！

「さて、大人しく捕まってくれろと手間が省けるんだが」

その声に超はビクリと動きを止めた。

えーと、何？何なのこの気の量は？前見た時と全然違うんですけど。あれですか、気を抑えられちゃう感じの人ですか。てゆーか、なんで着いて来てるでござるか。とか、もろもろ聞きたいことはあるけども、とりあえずは、

「どっせーいつ！」

「おっと」

振り向きざまに、目眩ましの気弾を追っ手　高畑センセに放つ。
同時に、

「んーっ！？」

結界の外に向かって、力いっぱい超を投擲。着地はどうにか自分で頑張れ、捕まるよりはマシなハズだと心の中で十字を切る。

「気の使い手か。もう1人を逃がして、自分はその時間稼ぎというところかい？」

げ、目論見がバレテラ。思わず高畑センセの気当たりに気圧されて、交戦体勢をとる。

「片方を逃がそうとするということは、そちらが大事な情報を握っているということかな」

大事な情報を握ってるかどうかは知らないけど、何かは企んでいそうではあった。

「沈黙は肯定と受け取っておくよ」

別に肯定しているわけではない。ついでに言うと、声を覚えられ
ると万が一困った事態になる可能性も考慮して喋らないだけだ。変
声術はあまり得意じゃないのでござる。

「それならあちらを追おうかと思ったけど、さすがにそれは許して
くれないようだ」

いやいや、滅相もないでござるよ！このポーズは、ほら、なんて
いうか防衛本能っていうか。

高畑センセは両手をポケットに突っ込んだまま、まるで無警戒に
弧を描くように近づいてくる。

高畑センセは本気のエヴァンジェリンさんには劣るものの最強ク
ラスには入るらしい。とすれば、別荘の中、ましてや魔法を使えな
いエヴァンジェリンさんにも真つ当な対抗手段を持たない俺が勝て
そうな道理も無いわけで。

「実はあちらの方の『彼女』には心当たりがあつてね」

「……………（な、なんだってー！）」

心の中で戦況分析をしている俺を差し置き、なにやら高畑センセ
による衝撃の告白。

おいおい、超さんや。あなたの正体バレてるクサイですよ。つー
か、逃げたの超無意味じゃん。俺が時間稼ぎする意味は……無くも
ないか。心当たりがあるだけで、確証には至ってないわけだし。な
ら精々、時間稼ぎでもしま

「そついつわけで、今は正体不明であるキミの方を優先させて貰う
よ」

その瞬間さらに高畑センセの気配は膨れ上がる。

ハハハ、そんなこと仰らず遠慮無く超を追って下さいよ。こちらとしては、人払いの結界外に逃した時点で依頼は達成してるわけですし、いわばこれはアフターサービスの的なものでして、時間稼ぎ？ ナニソレ、ウマイノ？こんなの相手にしてられるか、バーカ！バーカ！

パンッ！

「って、がはっ！」

仮面の上から顔を 殴られた？何だ今の？高畑センセは、両手をポケットに突っ込んだままで何かをした様子は無い。気を放った気配も無かった。だとすると、魔法的な何かか？でも、そんな素振りには微塵も、

パパパンッ！

「あっ！がっ！ごっ！？」

「ほう、これを耐えきるのか。なかなかやるなあ」

高畑センセは素直に關心しているようだ。少しではあるが、眠そうな目を見開いたのがその証拠だろう。ちなみ俺も仮面の耐久性に少しばかり驚愕を覚えていたりする。

だが、伊達に耐久性に優れた体作りはしていない、確かに目に見えない攻撃を避けるのは困難だが、ダメージ自体はそう大きいものではない。

それに、俺は見た。目に見えない攻撃のカラクリを。

今の攻撃を喰らう寸前、俺は分身の維持に必要な最低限の気を残し、

自身の全ての気を身体強化、視力強化にあて、高畑センセの動きを把握することにのみ務めた。

高畑センセの攻撃を受ける寸前、彼はポケットに突っ込んだ両手を尋常では無い速度で抜くと同時に、その拳で俺を撃ち抜いたのだ。距離があるため当然拳は届かないが、それによって撃ち出された拳圧は別。

仕組みがわかってしまえば後は簡単。目に見えなくとも、拳圧を凌ぐ装甲、この場合は拳圧を凌ぐ身体強化をしてしまえば良いだけだ。あるいは、視認出来るほどの気を纏うか。これで時間を稼いで、後は頃合いを見て逃げればいいが

パパンッ！

「！なるほど、思った以上に……なら」

こちらの期待を裏切り、先ほどとは違う手応えを感じたのか表情が変わった。高畑センセも見破られたことに気付いたのだろう、先ほど膨れ上がった気配にトゲトゲしさを含み始める。

すると、高畑センセはおもむろにポケットから両手を出した。

まずいな。このままじゃジリ貧になると踏んで、勝負をつけにきたか？

「左腕に魔力、右腕に気」

高畑センセが呟くと同時、両腕は視認できるほど光を放つ。それを胸の前に持っていていき、

「合成っ！」

瞬間。

合わせたソレは、先ほどとは桁違い。『気』であって、『気』ではない異様なオーラをその身に纏う高畑センセの姿がそこにはあった。

高畑センセが俺に向かって飛び上がって来ると同時に、ポケットから出した拳が振り下ろされ

ズドオオオンッ！

「うーん、少しやり過ぎたかな」

目の前には、5メートル程のクレーターとその中心で気絶している彼の姿があった。

彼が何故、侵入者、おそらくは超くんを庇ったのかはわからない。仮面をつけているのは、顔を隠しているつもりだったのだろう、気感覚で正体はバレバレなんだけどね。

「どうしたものかな……」

死んではないはずだが、ピクリとも動かないのを見たところ完全に無力化したとみて良いだろう。分身が得意らしいが、その気配も無い。

しかし、まさか初撃の居合い拳を耐えきったのはおろか、あんなに呆気なく破つてくるとは思わなかった。人づてに聞いていた以上のタフさに、ついこっちもムキになって、感卦方を使った豪殺居合い拳なんて使ってしまったわけなんだけど。

「んー、あつちは無理か」

目を瞑り、周囲の気配を探るも何の気配も感じられない。

時間はたいして掛かってはいないけど、あの超くんにとっては十分と言える時間のはず。彼女も一体何を企んでいるかは知らないが、面倒だけは起こさないで欲しいな。

「とりあえず、超くんのことについて彼に知ってる限り吐いてもらうしか……！」

ひとまずガントルフィーニ先生と合流しようと思い、彼を回収するために自身が作り出したクレーターに近づいたその時。

彼は僕の目の前で、ズブズブと地面に沈むように消えていった。

「しまった、逃げられたか！」

迂闊。彼が居た場所を触って確かめるも、なんの痕跡も感じ取ることとは出来なかった。明確な証拠が無い以上、彼女らを捕まえることは出来てもシラを切られてお終いだ。こういうのは現行犯で捕まえなくては意味がない。

やれやれ、教え子を捕まえることも出来ず、その協力者も捕まえることが出来ず、いったい何のために出張ってきたのやら。

ピピ、ピピピピピ

無機質な音を鳴らす携帯のアラームで目を覚ますと、そこは男子寮にある自分の部屋だった。

「あれ？いつ帰ってきたっけ」

帰ってきた記憶が無い。昨日は確か桜咲と警備に出て、途中で超を拾って、その後に高畑センセと戦う、というか一方的にやられてと俺の記憶はここまでしか無い。が、

「そういうことが」

分身Aからの記憶で残りを補完。それによると、俺は高畑センセに瞬殺された後、逃走の補助のために地中に潜んでいた分身の土遁によってどうにか助けられたようだ。それから、この部屋に戻り、桜咲と共に居た分身Bも帰宅。身体機能の回復に努めるために同化して、今に至る、と。

「高畑センサー、か……エヴァンジェリンさんより強いんじゃないのか？」

あの妙なオーラを纏う前と後の差。今の俺では到底適わない、そのアテも無い。せめて、仙豆的なアイテムがあればな。

ピピ、ピピピピピ。

未だ鳴り続ける携帯電話が目に入る。アラームを止め忘れていたのを思い出して、手に取り、携帯電話を開いてアラームを止めた。ふと、おもむろに目付に目を向けると、

「げっ、よう、び……っ？」

いやいや、待て。昨日は土曜日だった。であれば今日は日曜日ではないといけない。なのに、日付は月曜を示している。

そう、丸一日寝ていたという事である。

「つて、冷静に携帯見てる場合じゃねえええええ！」

これも全て高畑センセのせいだ、そうに違いない。と心の中にある、『いつか10倍返しにするリスト』に、新たに一つの名前を刻むシノブであつた。

時は少し遡って、日曜日。

そこで、前日の様子を記録した映像を見ている者達がいた。

「しかし、高畑先生をその気にさせる程度の実力は持ち合わせているようですねー」

「わざわざ、危険を侵して試してみた価値はあった、と」

「たのは残念だたが。問題は長瀬さんのことですか？」

「いや、違うネ。彼女に関して手を出さなければ、シノブは問題ナイ」

「では？」

「そろそろ来るハズの、ワタシの御先祖様ヨ」

「ああ、例の」

「まだ10にも満たぬお子様ダガ、使い方によつては、充分学園側に対して良いカードになるハズネ……フッフ、会うのが楽しみヨ」

18話（後書き）

あれ？主人公がまともに勝ったのって雑魚だけじゃね…？

19話（前書き）

就活中につき投稿が遅れに遅れました。

正直これを書き終わったあと何してるんだろっ俺orz
って気分になった……しかし自重も自嘲もしない！
ネギ登場回、しかし空気

19話

一通のメールを受信。

『もう限界だ。意味がわからねえ』

三学期が始まり、モテない独り身の男性にとって地獄の月のXデーから数日も経たないある日のことだ。

差出人は、ちう。

初等部から学園に居たという彼女が、いまさら並の出来事で参るわけでもあるまい。だとすれば、よほど直面し難い出来事でもあったのかもしれない。

最も、今までの鬱憤が積もりに積もったという可能性もあるのだが、それにしても何か限界と感じるに至るきっかけがあつたはずだ。とりあえず、

『がんばれ、超がんばれ』

とだけ送っておいた。返信は無かつた。

その日の彼女のホームページにある日記が荒れに荒れていたのは余談である。

翌日、こんな噂話を耳にした。

『10歳の子供が教師をしているらしい』

なんでも、麻帆良女子中等部のどこかのクラスに新しく担任が就いたらしい。

担任が代わる、それだけならよくある話なのだが、その担任とやらが噂の当人である『子供先生』だそうな。

そこでふと思い出す。昨日はスルーしちゃったけどもその原因も見えてきた。

昨日ちうから届いたメール、女子中等部に10歳の子供が教師として赴任したという噂、そして何故か特異な奴らが集まるあのクラス。

深く考え無くとも、ちうのメール原因は特定できたようなものだ。

「それにしても10歳のこどもが女子中等部で教師か。人格形成に変な影響を与えそうな……あれ？」

なんだか昔そんな話を聞いたことが無かったか？なんだったかな、こう喉のあたりまででかかっているんだけど。

まあいいか、思い出せないってことはたいしたことでもないんだろう。

「動きが鈍くなってきたぞ、コゾー」

「ちいつ、この2人相手はキツイですって！」

「ハッ、その程度で何を言っている。チャチャゼロも茶々丸もまだ本気では無いぞ」

「ケケケ、ブッコ殺シテヤンヨ」

ポテチをバリバリ食いながら、床に寝っ転がってつまらなさそうに野次を飛ばすのはエヴァンジェリンさん。

そして、絶妙なコンビネーションで襲いかかって来るチャチャゼロと茶々丸の両名。

チャチャゼロは変則的かつ明らかに殺気のこもった攻撃を、茶々

丸は致命度の高い攻撃はしてこないものの、こちらの攻撃パターンを解析、学習し、適宜対応してくるため隙が

出来ると確実にそこを突いてくる。

何故こんなことになっているのかなんてのは言わずもがな、昨年の秋頃に高畑センセが俺をぶっ飛ばしてくれたからである。

それを聞いたエヴァンジェリンさんは散々俺をこき下ろした後に、

「チャチャゼロに遊んでもらえ。あいつも暇そうにしていたし最近
は遊び相手もいなかったから良いオモチャとして扱ってもらえるだ
ろう」

「チャチャゼロ？誰ですそれ？」

「わたしの従者だ」

「名前からすると茶々丸のような口ボ娘ですか」

「いや、人形だ」

「……………」

「何か言いたそうだな」

「従者が口ボ娘に人形か……なんだかんだ言いつつ別荘貸してくれ
たり俺とも話すしちよっかい出してくるし、エヴァンジェリンさん
って実は結構寂しがり屋っぽいよな。とか言ったら

怒るだろうな。家の中とか服も少女趣味だし、精神的にも幼いの
かも？精神は肉体に引っ張られるとか言うしね。今度からもうちよ
つと優しくしてあげよう。いえ、特に何も」

「思ったことが全部口から出とるわーっ！！」

怒りと恥ずかしさからか、顔を真っ赤にしてプルプルと震えるエ
ヴァンジェリンさんの飛び蹴りはそれはもう痛かった。ついでに可
愛かった。

と、まあそんなわけで彼女の従者による遊びと称した修行を昨年
から定期的に行っているわけだ。

「ふーっ、今日はここまでかな。ありがとうございました」

本日の修行を終え、今は吸血タイム。

エヴァンジェリンさんが俺の血をちゅーちゅー吸いながら、そう
だ、と切り出した。

「明日は用事があるからコゾーの相手はできん」

「用事？珍しいですね」

「ほっとけ、大事な用事なんだ。そういうことだから明日は別荘を
使うのはナシだ。わかったな」

「了解しました」

明日はどっちみち年に2回の学園メンテで夜間の警備に増援とし
て駆り出されることが決まっていたため、元からここに来るつもり
は無かったし問題は無い。

それよりだ。

「今日はやけに吸いますね、そろそろやばい感じがヒシヒシしてい
るんですが」

「明日は大事な用事があると言ったはずだ。（あの忌々しい呪いか
ら解放されるための……）それに備えて多めに必要というわけさ」

「まーたロクでもないこと考えていそうですね　って、ちよつと
吸いすぎでしょう!？」

「ズゴゴゴゴッ」

「そんな全てを吸い尽くすような吸い方されたら俺はもう……アイ
ッ！」

……

目が覚めたら男子寮にある自室だった。

ここに帰ってきた記憶は当然無いが、修行を始めるようになってからはよくあることだったので特に気にしないことにしている。

いつものように学校へ向かい、放課後もいつものように女子達の成長を脳内ハードディスクに保存し、いつもより早めの夕食を超包子で済ませた俺は早速警備担当区に向かった。

そして、

「始まったか　を？」

時刻は20時。

電力が落とされて学園は一気に闇夜に包まれ、唯一の光源は月の光だけだ。

同時、急激に誰かの気配が膨れ上がるのを感じた。

「なーにが大事な用事だよ。やっぱ、ろくでもないことしようとしてるんじゃないか。この方向は中等部の女子寮か？女子寮か……ふふふ、まさか危害を加えるとは思えないけど念の

ために行くべきだよな、うん。何かあったら大変なものネ」

女子寮に行くべきだと本能が叫ぶのだ。だって、夜の真っ暗な女子寮ですよ？キャツキャツウフフなドキワクイベントが見れるかも知れないじゃないですか。

相手は中学生？そんなの関係ないね。だって、良くも悪くも中学生に見えない奴らばっかだしね。

そうと決めたらば、ささっと印を切って分身を出現させ、その場

を任せた俺はすぐに女子寮へと向かった。

女子寮へ向かう途中に誰かの話し声が聞こえたため、『早く向かえ！この機を逃すな！』という本能に抗い覗いてみると、そこにはスーツを着た可愛いらしい

少年と人語を操るオコジヨがいた。

「ここは僕一人で行く！」

「ええ〜？何バカなこと言っただよ兄貴！」

「（おっと、あれに見えるは噂のネギ少年じゃないか。こんなところで何をしてるんだ）」

オコジヨが喋ってることには突っ込まないのかって？ハハ、人形が武器持って笑いながら殺しにくる世界ですよ？動物が喋るくらい問題ない。

「えーい、わからず屋！もう知らねえよ！」

遠くの誰かにそんな説明をしていると、どこから取り出したのか銃やら杖やらその他諸々を身に着けたネギ少年は杖に跨るやいなや飛んでった。ついでにオコジヨはどっかいった。

「何かあるとは思ってたけど、やっぱり魔法関係者か。そうでもないとの歳で先生は無いよなあ。魔法使いで先生なネギくんか。魔法先生ネギ……あれ？」

やっぱり聞き覚えがあるような……って、そんな場合じゃ無かった。早く向かわねば！

パッと行く

歩いて行く

「というわけで、パツと移動しました」

何が、『というわけ』なのかはさておき女子寮の中に侵入した俺は彼女の気配を追ってスニーキングミッションを開始した。もちろんダンボールは忘れていない。

「こ、これが女子中学生の生活空間っ！すーはーすーはー……心無しか甘い気がする！」

んなこたあない、どう見ても変態である。

それにしてもいくら電気が落とされているとはいえ不自然に静か過ぎた。

一箇所を除き人が動いてる気配がしないのだ。現代っ子がこんなに早い時間から寝てるわけもあるまいし、唯一その気配のある方向がエヴァンジェリンさんの気配がする

方向でもあるわけで、

「寄り道したかったけど、つとここだな。大浴場……って風呂かよ！うひょー！」

エヴァンジェリンさんナイスチョイス！本能がスタンディングオベーションで誉め讃える。だって、女子風呂だもの。しかもお仕事中だから正当性があるもの。

まずは、中の様子を確認しなきゃな。

「（お邪魔しまーす！ふむふむ、予想通りエヴァンジェリンさんに茶々丸、エプロンドレスを着た女子4人がネギ少年を揉みくちやにして　って、あれ大河内じゃね？」

何やってんだよ、おい）」

言葉通り目の色が変わっている、エヴァンジェリンさんに何かされたか？ま、今はいいや。

にしても、5Pだと？まさか10歳でそんな歪んだ願望を持っているとはなかなかやるではないかネギ少年。

「くっ！」

「（ぐうつ、羨ましけしからんぞネギ少ね、ふおおおお！ぐつじよぶ！マジぐつじよぶ！感動したっ）」

シュバッ

ネギ少年が投げた2つの液体が空中で交わると同時、大河内と見知らぬ女子の服が弾け飛んだ。そして露わになる2人の（以下自主規制

いやいや、落ち着け。クールだ、クールになるんだ俺。

「（どうせなら近くに居た他の2人も脱がすべきだ、よって60点。感動したは褒めすぎだよな、うん）」

落ち着く方向が明らかに間違っているとかなんなツツコミが聞こえるが気にしない。

とりあえず今すべきことは、携帯にネギ少年の勇姿を収めることだ。ほら、学園に報告する必要があるかも知れないし！

その過程で、裸の女の子が写っちゃったりするのは仕方のないことである。ちなみに麻帆良製なので消音対策もばっちりだ。

「（むっ、ネギ少年が邪魔で上手く撮れ）」

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！大気よ水よ白霧となれ、彼の者らに一時の安息を！眠りの霧！」

バフオツ

ネギ少年がかつちよいーポーズ決めつつ呪文を紡ぐと、気の抜けるような爆発音と共に白い霧が4人の元で発生。その内2人は察知して避けたものの、服を脱がされた2人は

まともに喰らってしまいパタリと倒れる。ネギ少年はその2人を抱きとめ、床に仰向けに寝かせた。

「すいません、アキラさん亜子さん後で必ず吸血」

ネギ少年が2人に何か言っていたが、俺の頭の中はそれどころでは無かった。

「（ぶふおっ！ネ、ネギ少年なんてことを！？お前は神かつ、悪魔かつ！？こ、この位置からだと足を向けて寝ているように見えるわけで、それはつまり……カハッ！）」

なんとという破壊力っ！高畑センセ、いや、キレたエヴァンジェリンさんすら凌ぐこの威力っ！いいだろうネギ少年、認めてやる。お前がナンバーワンだ！

噴出す鼻血にすら気づかず、この奇跡の光景を一瞬たりとて逃すまいと扉の隙間から一心不乱にカメラに収める。浴場の扉の向こうで破碎音やら爆音やら聞こえていたが

気にさえならなかった。

俺が正気を取り戻したのは何十分後だっただろうか？いや、もしかしたら数分の出来事だったかもしれない。つまりは時間感覚が狂う程度には我を忘れていたということだ。

いつの間にか被写体の間近に居ることが良い証拠である。

無意識って怖いね！。

そこで、気がついた。辺りに気配は確認できず今自由に動けるのは自分一人だけだということに。

「おいおいおい、こんなところに女の子が真っ裸で寝ているよ？どうするの？ねえ、どうするの？」

自分の心に語りかけると、二つの声が聞こえてきた。いわゆる天使と悪魔の声という奴だ。

『ハハハ、迷うこたねえ頂いちまえ！おっと、気づかれた時のためにちゃんと脅迫の材料はとっておけよ？ぐへへ』

『据え膳食わぬは男の恥ですよシノブ、彼女らはあなたに食べられるのを待っているのです。さあ、遠慮なくお食べなさい』

「オーケー、俺の心の中には外道な悪魔と丁寧な口調の悪魔しかないことはよくわかった。俺も男だ、悪気はないがお嬢ちゃん達はおいしく頂くのではないか。

はーはっはっは、と誰だこんな時に電話してくるおバカさんは」

携帯のディスプレイにはオーナーと表示されている。つまりは超

鈴音。

無視すると後が面倒そうなのでしぶしぶ電話に出た。

「もしもー」

『同じオトメとしてそれ以上は流石に看過出来ないネ』

「へ？」

『ドウしてもというのでアレば、楓サンに最初から今までの映像ヲ送るコトになるガ良いカ？』

まさか、監視されていたとっ！？慌てて辺りを見回すがカメラは発見できない。相手はあの超鈴音である、巧妙に隠しているはずだ。

残念だがやむを得んな。

「ハハハ、冗談に決まってるじゃないですかー。無理矢理とかそんなこと出来るわけ無いですよーはっはっはー」

『俺も男だ、悪気しかないがお嬢ちゃん達はおいしく頂こうではないか』

スピーカーから聞こえてきたのは聞き覚えのある外道のセリフ。

「いや」

『俺も男だ、悪気はないがお嬢ちゃん達はおいしく頂こうではないか』

「あの」

『俺も男だ、悪気はないがお嬢ちゃん達はおいしく頂こうではないか』

「すみません、もうしませんからっ!」

『わかればいいネ。トウゼン画像の方モ』

「それはもう、はい!喜んで削除させていただきます!」

『ウム、なら良いアル。それより、エヴァンジェリンさんの方は良いのカナ?』

「……忘れてた」

『早く行くと良いネ。では』

ツイッター、と寂しい音を響かせる携帯を操作しさつき撮った画像を片っ端から削除する。

「しかし俺の脳内に焼きついた光景は今もまだ残っている!……あーもう、何やってんだる俺」

自身の行動に深い反省をしつつトボトボとエヴァンジェリンさんの気配を追うのだった。

結局、俺が向かった時には全てが終わったあとで、驚くべきことにネギ少年が勝ったということだけはわかった。

停電が復旧するのがもう少し遅ければとエヴァンジェリンさんは唸っていたが、それがどう勝敗に関係するのはいまいちわからない。

吸血鬼だから暗い方が力を出せるということだろうか？

「ところでコゾー。お前、私とぼーやが去った後の大浴場で何をしていた？」

「え」

「ふんっ、気づかないとでも思っていたのか？だが……ロクなことをしていないかったという事だけはわかった、くだらんことが出来んように血を抜いておいてやる。茶々丸」

「はい、マスター」

「覚悟するんだなコゾー」

「待って！今日は血を充分出してるからこれ以上は生命活動に支障が……アッ、アッ、アッ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1694k/>

どこか遠く

2010年11月22日14時01分発行